



Title	沢庵宗彭『不動智神妙録』古写本三種・『太阿記』古写本一種
Author(s)	佐藤, 鍊太郎
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 103, 24-139
Issue Date	2001-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33992
Type	departmental bulletin paper
File Information	103_PL24-139.pdf



沢庵宗彭 『不動智神妙録』 古写本三種・
『太阿記』 古写本一種

佐藤 鍊太郎

はしがき

沢庵宗彭（一五七三～一六四五）が、將軍家指南役の柳生宗矩（一五七一～一六四六）に与えた教訓として有名な『不動智神妙録』は、心身を自由自在に働かす禅の境地と剣術の極意とを結び付け、人を殺す剣術を人を活かす剣道に昇華させた理論書であり、剣禅一如を説いた奥義書として、江戸時代から今日に至るまで、武道に志す人々にひそかに愛読されてきた。

『不動智神妙録』の古写本、刊本を調べてみると、書名は、『不動智』、『沢庵和尚兵法問答』、『沢庵和尚剣術法語』、『沢庵和尚神妙録』など、一定していない。恐らく、『不動智』と『沢庵和尚神妙録』とを結び付けた呼称が、明治以降の活字本の通称となったものと考えられる。『無明住地煩惱諸仏不動智』略して『不動智』が本来の書名である。

『從容録』第三七則評唱に、「華嚴論以無明住地煩惱便為一切諸仏不動智」とあるように、唐の李通玄『新華嚴經論』卷一七「十住品」に、「以為根本無明住地煩惱便為一切諸仏不動智、一切衆生皆自有之」とあるのが書名の由来であり。煩惱がそのまま悟りに通じている、という煩惱即菩提の禅の思想を兵法の極意に当てはめたのがその内容である。

明治以降に刊行された『不動智神妙録』は、数多く存在するが、何を底本としているのか、明記していないものが殆どである。古写本や刊本の系統に關する研究は、皆無に等しいのが現状である。わずかに今村嘉雄編『日本武道体系』巻九（同朋社、一九八二）の解題で、一般に流布しているものとして、細川家蔵版『沢庵和尚全集』巻五所収『不動智神妙録』（一九四九、国会図書館所蔵の『不動智』の二種について紹介しているだけである。

『沢庵全集』本の解題によると、その底本は、細川家蔵版ではなく、柳生家本であるが、今村嘉雄『定本 大和柳生一族―新陰流の系譜―』（人物往来社、一九九四）によると、沢庵直筆の書簡は、柳生家にも残っておらず、その所在は不明である。

現在、流布している活字本、例えば『武術叢書』や『武士道全書』所収の『不動智』は、国会図書館所蔵の『不動智』を底本として、そこに『沢庵全集』本から沢庵が柳生宗矩に宛てた諫言の部分を増補している。活字本には内容に異同があるばかりか、意味の通じない個所が見受けられる。従って、活字本がどの写本、刊本に由来するのか、確認する必要がある。

『不動智神妙録』の諸本を調査比較した結果、次のように、写本五種、刊本二種、活字本三種に分類できることが判明した。

写本

写本の第一は、宮内庁書陵部所蔵の『不動智』である。沢庵が寛永十三年（一六三六）に出石城主の小出吉英に贈った書簡「小出吉英に贈る書」（『沢庵全集』巻四）によると、沢庵は、寛永十三年九月二十四日、家光の御前で柳生宗矩らと兵法談義をし、それを書きつけて、二十七日に家光に差し出している。この書陵部本は、簡素な内容から推して、原初の形を伝える写本であると考えられる。巻末に、「無明住地煩惱諸仏之不動智」とあるのが書名であり、外題の『不動智』はその略称である。

書陵部本の系統に属する写本としては、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵『沢庵和尚兵法物語』が挙げられる。この『沢庵和尚兵法物語』の付記には、「右寛永三、從□大樹、兵法之事以柳生但馬守沢庵和尚、御尋時如此云云。爲□大將軍家光公貴命、柳生但馬守兵法極意於東海寺沢庵和尚令述談、備上覽所之一巻也」とある。また、奥付には、「享保十乙巳臘月十七日書之。文祥堂三好長英子華」「右一冊、於武江以書林武田藤助蔵本写之。刀術蘊奥可倚信而脱文誤字甚多。俟異日全本之出以正焉。元文五年庚申七月十八日、谷丹四郎垣守識」とある。享保十年（一七二五）の写本を元文五年（一七四〇）に書写したもので、他の写本から「急水上打毬子、念々不停留」と「前後際断」の二章を増補している。

写本の第二は、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵『不動智』である。この

狩野文庫本は、書陵部本を増補改訂し敷衍した内容となっている。奥付に、「安永三年九月二写之トアル。于時文化五辰年三月野上先生ヨリ借讀、同四月三日反、黄昏寫終」とあるので、安永三年（一七七四）の写本を文化五年（一八〇八）に写したものである。なお、狩野文庫本では、沢庵の著した『太阿記』が前に置かれている。

写本の第三は、国立公文書館内閣文庫所蔵『沢庵和尚柳生但州江兵法問答』である。沢庵が宗矩に寄せた教訓書であり、丁寧な候文で記されている。幕臣、宮崎成身が、幕末期に手写したもので、宮崎成身『視聴草』四集之四に収録されている。なお、『視聴草』には影印本（汲古書院、一九八五）がある。また、原本の写本が、内閣文庫と国会図書館にそれぞれ一部ずつ所蔵されている。内閣文庫本の内容については、『剣窓』（全日本剣道連盟）に連載中の拙稿「劍禅一如 沢庵『不動智神妙録』を読む」を参照されたい。

写本の第四は、国会図書館所蔵、白河桑名藩印「不動智」である。末尾に「敬ノ一字」の章があり、奥付に、「此法語、沢庵和尚述作焉、見贈柳生但馬守殿江」とある。「敬ノ一字」の章は他の写本には見えない。東北大学附属図書館「龍宝山大徳寺沢庵和尚劍術法語」もこれと同じ系統に属する。

写本の第五は、蓬左文庫所蔵「沢庵和尚兵法問答」で、これには後人の序文が冠されている。禅文化研究所所蔵の写本『沢庵和尚不動智』もこの系統に属する。

刊刻本

刊刻本の第一は、駒沢大学図書館及び東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の指月庵蔵梓『劍術心法 沢庵和尚神妙録』である。奥付に、「東叡山御用、御書物所、江戸下谷御成道、青雲堂、英文蔵製」とある。なお、駒沢大学図書館所蔵本の外題は、「不動智神妙録」となっているが、本来のものではないと思われる。なお、静嘉堂文庫所蔵の『劍術心法 沢庵和尚神妙録』は、この刊刻本の写本である。

刊刻本の第二は、蓬左文庫の写本の系統に属する駒沢大学図書館所蔵『沢庵遺稿 不動智』である。奥付に、「安永八己亥載二月吉辰（初刻）、京都書林、醒井通五条上町、伊豫屋佐右衛門梓」とあるので、一七七九年刻本である。その覆刻本が駒沢大学図書館や花園大学禅文化研究に所蔵されている。覆刻

本の奥付には、「浪華書肆、高麗橋一丁目、藤屋善七、唐物甲心齋橋、同吉兵衛、寛政三辛亥年九月求板再刻」とある。一七九一年の覆刻である。

活字本

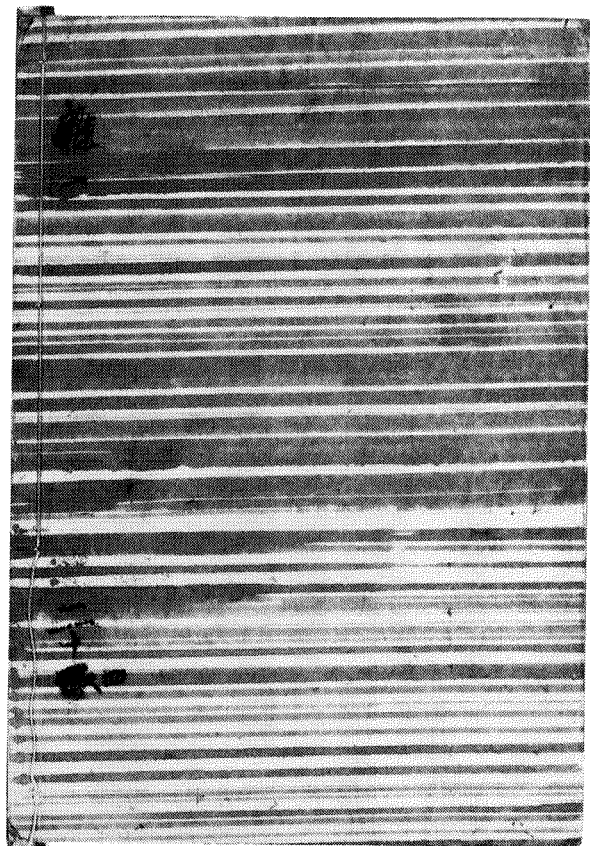
活字本の多くは、内閣文庫本(写本の第三)と国会図書館本(写本の第四)のいずれかに由来する。

内閣文庫本に由来する活字本としては、山田孝道編『禪門法語集』(光融館一九〇五 所収『不動智神妙録』がある。『沢庵和尚全集』所収『不動智神妙録』もほぼ同じ内容である。ただし、この『沢庵全集』本には、「水焦上、火酒雲」という題意不明の一章があり、『伊勢物語』の「武蔵野はけふはなやきそ若草の妻もこもれり我もこもれり」という歌を挙げて、「此歌の心を、誰か、白雲^{アヤ}のむすはば消えん朝顔の花」と述べている。これは内閣文庫本には無い章である。この『沢庵全集』本は、井上哲次郎等監修『日本哲学全書』第一二巻、今村嘉雄編『日本武道体系』第九巻(同朋社、一九八二)にも収録されている。

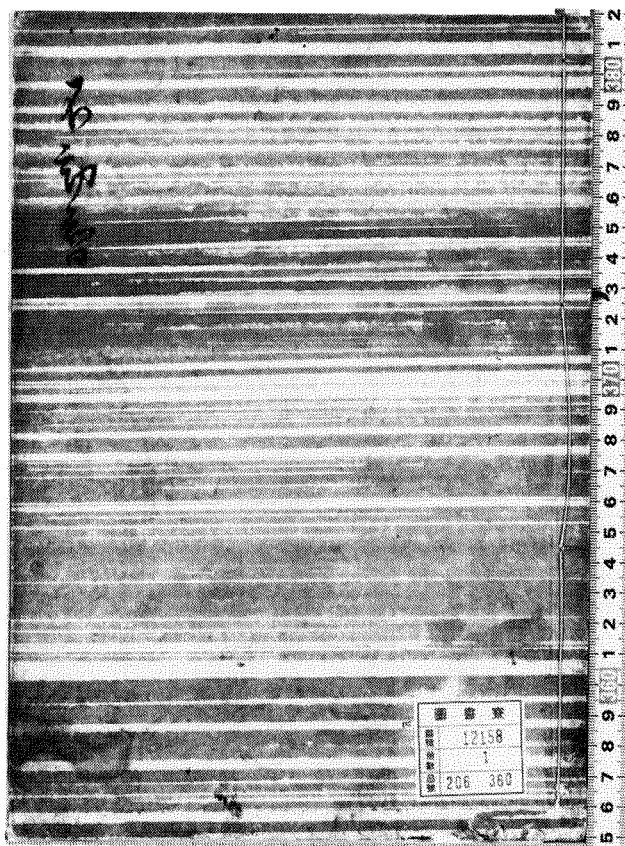
国会図書館本に依拠した活字本としては、井上哲次郎監修『武士道全書』巻二(時代社、一九四四、国書刊行会、一九九八再刊)、国書刊行会『武術叢書』(一九一五、一九九二再刊)所収の『不動智』がある。いずれも、『沢庵全集』本より沢庵の柳生宗矩への忠告文を増補している。

以上の諸本の系統図については、拙稿「沢庵宗彭『不動智神妙録』の諸本」(『印度哲学仏教学』第一五号)を参照されたい。

本稿は、右に紹介した諸本の原形として重要であると考えられる三種の古写本、つまり、宮内庁書陵部本、東北大学狩野文庫本、内閣文庫本の三種について、写真版と併せて全文を翻刻したものである。なお、狩野文庫本では、沢庵の著した『太阿記』が『不動智』の前に置かれている。この『太阿記』の写本は孤本であり、内容的に『不動智』と関わる資料なので、ここに併せて付載することとした。博雅には、誤読に気づかれたら、御批正頂ければ幸いである。



(A 裏表紙)



(A 『不動智』表紙)

沢庵宗彭『不動智神妙録』古写本三種・『太阿記』古写本一種

凡例

一、底本を次の写本とし、写真版と活字文を示し、対照しやすくした。

A 『不動智』宮内庁書陵部所蔵本 (本文31頁〜53頁)

B₁ 『太阿記』東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本 (本文57頁〜73頁)

B₂ 『不動智』東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本 (本文73頁〜89頁)

C 『沢庵和尚柳生但州江兵法問答(沢柳問答)』国立公文書館内閣文庫本 (本文91頁〜139頁)

一、翻刻にあたって、次の方針を採用した。

1 改頁・改行は、原則として底本に従ったが、補記がある場合には、行を増して、二行とし、括弧() を付して補記であることを示した。

2 句読点については、新たに補ったが、底本についている場合には底本に従った。

3 平がな・片かなについては、原則として通行の字体の平がなとし、かなの反復記号も平がなにし、必要な場合には濁点等を付した。

4 漢文部分の返り点・振りがな・送りがなについては、原則として底本に従ったが、振りがなは平がなに、送りがなは片かなに改めた。また、底本に脱漏がある場合には括弧() を付して、補記を加えた。

5 漢字は、原則として底本に従い、草書体を楷書体にし、新旧の字体を併用した。底本で漢字を訂正している場合には、訂正後の漢字を採用した。

6 漢字の踊り字は、原則として底本に従った。

7 明らかな誤記がある場合には、該字に傍線を付し、推定できる正しい字を鈎括弧「」を付して該字の右に示した。

A 『不動智』 宮内庁書陵部所蔵本 (31頁～53頁)

一

無明と云は明になしといふ文字也。迷を申也。住地とは留といふ文字也。住は留るにて候。留るとは何事なりともなすわざ見る事聞事に心の留るを云也。留る事を嫌ひ候也。兵法の上にて云ば、敵ふり上る太刀を一目見ると其俟そこに心が留り候へば手前が抜て、向の人にきられ候也。是を留ると可申候。敵ふり上る太刀を見る事は見れども、そつとも心を不_レ留、敵のふり上る太刀の拍子に合をふともせず、思案分別にも不_レ渡、ふり上る太刀を見るといなやにぴかりと出る石火のごとく、無拍子にふり上る太刀のつかへ押しこむべし。如_レ斯すきまもなく心を不_レ留はたらいたを禪には石火

の機と云也。兵法の上は、無刀のごとく刀を不_レ持して吾刀にする事、禪には是を却_レ而_レ地_ニ把_ル鎗頭_ニ倒_ル斬_ル人來_ルと云は、鎗はやりにて候。鎗頭とは鎗のしらはを取て却て人をつくと云事也。向から打とも、左右からうつとも、打人にも太刀にも程拍子にもそつとも心をとめば、手前がぬけて人にきられ可申也。敵に吾が心を置ば敵に心を取られ候。我身の内にも、心を一所に留れば、こころをとられ候。一切に心の留るを佛法にては住地の煩惱とて嫌ひ候也。手にてする所作、目にて見る事、耳にてきく事、よろづそこそこにとまるを嫌ひ候也。

一

不動知といふは、不動とはうごかずと云事也。知は知恵の事也。うごかぬと云て石か木かのやうに無性なる事はなし。心が不動ば、身も動くまい程に何の作も成まじきなり。左右十方八方へ心はうごきわたるやうにて動きながら、そつともこころの行先に留らぬを不動智といふ也。心は我身にありながらよそに働をいふ也。此智を名けて不動明王ともいふ也。右の手に劔を握り、左の手に繩を持て悪魔を縛せんと佛法を碍る者を降伏せんと眼を嗔つつ立て居らるる也。此やうなる姿、いづく共世界に居られ候にてはなし。姿は佛法守護のありさま也。内せうは不動智を躰にして人に

見せしめたる事也。悪魔といふは佛法をさまたぐる者を悪魔といふ也。不動の姿に怖て佛法をさまたぐる心を休さしめん為也。智慧ある人の上は不動明王と云は、人々一心正定たる不動智を明王と名付、人の一心動てうごかざる物事に動事せぬ所を不動と名付たる事也。又千手観音とて千の手あるべきや。弓を持たる手も劔を持たる手もあり様々の手あり。若一つの心が留るならば、九百九十九手は皆用に立まじき也。一方へ心を留ぬにより、千の手が皆用に立也。観音とて身に千の手はなけれども、不動(智)が開け候えば、身に手が千ありと同じ事じやとしらしめんが為に千手観音と云姿を作りたるぞ。不動[智]地の位へ至りぬれば、立帰て本の住地の初心の位へ落る也。是を兵法の上にて云ば、一切兵法を不_レ知時は身がまへ太刀のかまへ何もしらぬ者なれば、身にも太刀にもこころの留る事なく、人がうてばをつ取り合たり。何の心もなし。然れども所々様々の事を習ひ、身がまへ太刀のかまへ色々の事を習ひぬれば、色々所々に心が留りて、人を打んとすればとやかくやとして、却て人に斬らるる。初は不自由也。然るによりて一向に習はぬ時より不自由なれども、日を重て年月稽古すれば、後は身がまへも太刀のかまへも何にも其する

ありては、前記の不足は、法とて、
いふ、何の心も、
の心、
いふ、
上、
を、
あ、
此、
い、

此等の心、
此等の心、

と、
あ、
平、
い、
か、
い、
行、
う、
上、
捨、
一、

所々ところが留らず、手足に能を覺て心はどこやらへ
いんで何の心もなき様に成て、初何も不_レ知、習はぬ時
の心の様になる也。是始終孤_レたる位也。一から十へかぞ
へまわせば、一と十と隣に成る也。調子へ行ば、一の下一の
上と隣に成也。佛法にも文字にもづつと位たけ

たる人は、佛とも法とも文字あるとも何とも見へぬ様に
なる也。無心無念の位に落着する也。至極の位に至り
候えば手足身が覺へ候て心は一切入らぬ位に落着
するもの也。鎌倉の佛國禪師の歌に、

心ありてもるとなけれど小山田に徒ならぬかかしなりけり。

此歌のごとく也。山田のかかしとて人形を作りて弓矢

を持せて置也。鹿おぢて逃れば、用が叶ふ程には徒ら
ならぬと也。万の道に至りぬる人の所作の喩也。

手足身のはたらき計にて、心はそつとも不留して、

こころ心がいづくに有とも不知して、無念無心にして山田の
かかしの位へ行もの也。一向の愚痴の凡夫は、始から智恵

がないほどに、智恵が万事出ぬ也。至る人は智恵が不_レ入_ル

程に智恵が所作へ不_レ出也。万事の所作に知覚分別

がなく成て、初の凡夫の様に成て心を捨きらぬは

上手にて有まじき也。至極したる道には智恵を

捨るなり。

一
理の修業、事の修業と云事あり。わざとは手足にて

する事を云なり。初は兵法を習稽古候時、身が
まゑ、太刀、三箇九箇などの色々様の事を年月
を重ねて能く稽古する、是を事の修行といふなり。
又理の修行と云は、一心の上の至極成所を能く可_レ得_ル
心_ヲための修行なり。事の修行計にては万の所作へ
不_レ至_ル也。又理の修行計にても、事の修行なく候えば、
手足も身も自由にははたらず、太刀が自由につか
はれ申まじく候。然ば事と理の二つは車の兩輪の
ごとく也。一心に能納て手足に稽古候えば相應
いたすべきなり。

間に不_レ容_ル髪と云事あり。是を兵法にたとへ候

えば、間はあひだに候。縦ば物を二つ打合たる間へ髪筋も入ぬ
と云義也。髪とはかみすじの事也。透間もなきと云事也。

縦ば手をはたと打に、其俣はしとおとする也。手とて
とあひぬるおととの間、髪筋の入程の間もなく音が出る
なり。手を打て後に音が思案して間を置いて出る

ものにてはなく候。打と其俣音が出る也。兵法に譬て云
ば、敵のふり上る太刀に心が留り候へば間がぬけ候。其
間に手前のはたらきを間へ髪すじも不_レ入程な

らば、人の太刀は吾太刀たるべく候。禪の間答に
此心持が肝要なり。佛法に留りて心の残るを

嫌ひ候故、留るを凡夫と云也。立切たる早川へ玉を

一
流す様に、乗てぼつぼつと流れて少も留らぬ心を責ぶ也。
石火の機と云事有。是もはやき心持也。そつとも心をと
めず其俣取合候事をいふ也。石をはたとうては打とい
なやびつかりと火の出るにたとへ候也。心をとめて思案分
別して取合せふとせばなるまひぞ。石の火のごとくするを
石火の機と云也。西行集の歌に、

世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふ計ぞ
ころとむなと思ふ計ぞと云下の句を引合は、兵法の極
意にあたり候也。心をとめぬが肝要也。禪宗にて如何
是佛と問へば、問声の未だ絶へぬさきに手をはたと可_レ打。又
如何是禪と問へば、爪はじきもすべし。思案し何事

を云_{「ぞ」}としたらば煩惱也。思案分別に不_レ渡、血氣情

識のはなれたる、そつとも留らぬ心を責ぶ也。とまらぬ心は
色も香も移らぬ也。此移らぬ心の躰を神とも云、

佛とも云、禪心とも云、佛心とも云、本来の面目とも、祖
師再来意とも、至極の意ともいふ也。思案して後

に云候へば、金言妙句にても住地の煩惱_{「惱」}也。何れの道

にもとまらぬ心を專とする也。たとへ人を喚び候
時、應と答へたる心は不動知と云也。其人が何の

用にて可_レ有ぞと思案して後に用ゆふかと云た
は住地の煩惱_{「惱」}也。我を喚れたる声に心が留りて
心を動したる故也。何事にも心の動点せぬ様に

着のなきを好とする事也。如此の禪機を兵法に

取用てはたらし候はば、そつとも留る所有まじき也。

水上に打胡^マ荊^リ子^シ、^{「捺」}撥^ハ着^シすれば即^{「轉」}点^テと。胡荊子

はふくべ也。^{「捺」}撥^ハ着^シすとは手を持て押す事也。

ふくべを水へ沈てをせばひよつと脇へのき、おせば

のき、何としても一所にとまらぬもの也。至りたる人の

ころは、そつとも物にとまらぬ事也。水上のふくべを

おすがごとし。

一 應無所住而生其心。此文を訓に讀て見候えば、

應^{オウ}無^ニ所^ニ住^ス而生^ス其^ノ心^ヲと讀也。万のわざをするに、

せふと思ふ心が生ぜねば、手も不^レ動、心生れば、又其

所作に心が留る也。然る間止る所なくして心を生ずべしと

なり。心が生ずれば生ずる所に止る。生ぜざれば、手も

うごかず、行ばそこに留る心を生じて、其わざをなし

ながら留る所なきを諸道の名人と云也。佛法にて、

此留る心から執着心が起り、輪廻も是より起る

なり。此留る心は諸道に惡鋪候。此心止らざれば諸道が心の

ままに成也。生死のきづなにて候也。花紅葉を見ても、

花もみぢと見る心が生じながら、そこに止らざるころを

專とする也。慈圓の歌に、

柴の戸に匂はぬ花はさもあらばあれ詠てけりなうらめしの身や

花は無心に薰じぬるを、我は心を花にとどめ候てながめ

けるよと身をかへり見て、色にそむ心のいまだ尽せぬ事をなげく也。詠たりとも心をとめずば、過ちは有間鋪なり。見とも聞ともなすとも、一所に心をとめぬを至極とする也。さて敬の字を主一無適と註いたした、心を一心に取定てよそへちらさず、一切のわざをするに、其わざ一を主りてよそへ心をやらぬ様にして、刀にてうしろより斬るとも、其方へ心をやらぬを敬といふ也。最肝要の事也。殊に主君の御意を承る事、敬の字の心が眼たるべし。佛法にも敬の字心ある文也。一心不乱と説き給ふ事、是敬の字の心なり。敬白の鐘とて、三つ鳴して、合掌して敬白す。

夫佛とは唱へ上る也。此の敬白の心が則主一無適、一心不乱同義也。然れども佛法では、敬の字は至極の所にてはなし。吾心をとらへて乱れぬ様にと習へ、修行稽古の位にて候。此稽古年月積りぬれば、心を何方へ離ちやりても自由成位へ行也。敬の字の心は、心のよそへ行を引留てやるまひ、やれば乱ると思ひて、そつとも油断なく心を引つめて不自由で用が欠る也。兵法にあてて云ば、太刀を打つけよ、打手に心なとめそ。一切打手を忘て打てよ、人を斬れ、人に心をくなくよ。人も空、我打太刀も空と心得、空に心はとめられぬぞ。形ある物には目がとどまりて心が引るぞ。空には

とす。きん、あき、建長間、又覺禪師と云
唐の乱、てきんする時、あき、ト、又
覺禪師の腹、云、珍重と云、元、人、剣、電光、新
裏、截、玄、風、と云、烟、を作、り、れ、を、る、と、捨、と、手
と、合、と、釋、と、あ、り、を、り、又、骨、の、人、々、の、云、を、り、
新、も、電、光、の、同、あり、又、う、と、あ、き、を、り、を、り、す
れ、も、電、光、の、あ、り、と、同、は、行、り、も、念、も、あ、い、や
お、人、も、さ、り、を、り、も、せ、心、也、男、も、云、斬、人、也、ま
空、お、き、り、も、空、う、と、我、も、空、あ、れ、と、お、人、も、人、
と、も、あ、り、お、き、り、も、き、り、に、も、お、り、と、向、我、は、れ
あ、り、も、何、い、お、き、り、の、さ、る、同、は、亦、吹、松、風、を、斬

こゝに、二、切、お、き、り、の、風、を、ま、い、し、も、あ、き、
と、あ、い、ぐ、お、き、と、云、を、し、き、り、て、万、の、石、地、と、す、と
上、手、の、位、と、云、こ

一 不見、故、心、要、故、不、見、故、心、と、云、要、の、云、い、や、
お、き、り、の、ま、い、し、と、云、尋、求、と、我、の、ゆ、い、と、い、ふ、と、
そ、い、ふ、が、福、難、も、と、い、ふ、と、云、お、り、い、か、る、我、の、
ゆ、い、し、と、云、人、の、ま、い、し、と、云、と、云、き、な、行、と、
い、や、と、何、と、云、尋、求、と、我、の、ゆ、い、と、い、ふ、と、
又、即、唐、師、と、い、ふ、者、心、要、以、故、事、と、云、と、云、と、
お、き、り、の、ま、い、し、と、云、と、い、は、り、て、當、て、整、れ
福、の、名、と、い、ふ、と、云、と、い、は、り、て、物、と、云、と、云、と、

物よんのさねねんよはひけいけい心と捨てて
何國あつておつたれせんか初め就名のお記
よきより敵よふとていふは捨てていふて
あつておつて至るは捨ねばだ用はまゐる蓮の信
きぬ物きぬて信はまゐるは一層あつて
唱のわて信入るもさねねんよとていふは
正かきんていふあつて至る初めの時う事也
捨てる時よのさねねんよの信の付るあつて
邵康即ちあつて

一 中幸和尚の語は具より放る心は法は邵康
節より同しとていふはまゐるいふも又具ふ

退轉といふ是も中幸和尚の言ふも退轉常
智の心を捨てといふは一か法づはけり然
るもさねねんよの信は法とて一法めて退
転なるはさねねんよの信の付るあつて
信のいふあつていふあつて

一 平心あつていふも信はまゐるは一法
又さねねんよの信はまゐる物とあつていふは
さねねんよの信はまゐるはさねねんよの
信はまゐるはさねねんよの信はまゐる
はさねねんよの信はまゐるはさねねんよの
信はまゐるはさねねんよの信はまゐる
はさねねんよの信はまゐるはさねねんよの
信はまゐるはさねねんよの信はまゐる

物に心のしまぬ様によくつかひなして、心を捨て置いて、何國なりともおつばなせといふ義也。初心稽古の所作に心が止り、敵に心をとらるるに依てたとへにいふた義也。至り至ては心捨ねば用に立ぬ也。蓮の泥にしまぬ物なれば、泥に有ても清し。磨きたる水晶の玉は泥へ入てもしまぬ様に心をなして、行度所へやれ。心を引しめて置は初心の時の事也。

稽古の時は、孟子の心持なり。至極の時のところは邵康節が心持なり。

一 中峯和尚の語に、具(衍字)に須放心の心。」此の心は、邵康

節が心と同じ。心を一所に置なといふ義也。又具不

退轉」と云。是も中峯和尚の言葉也。不退轉、常に

替らぬ心を持と云義也。一度は能きづへつけども、頓(今でも)

くづれて常にならないほどに、能圖をし堅めて退「轉」点

せぬ様に心をもとと云義なり。前の放心の心を

能用ひかためよといふ義なり。

一 本心妄心。(妄心)といふ心は悪しき也。本心は一所に留て、

又全く身体に舒ゆるつまる物也。妄心といふは何

ぞ心に思ひそめて一所にかたまりたる心ぞ。本心

が一所に聚りてこりかたまりて妄心と成て有也。

如レ此なれば本心はうせ候故に所々の用が欠る

なり。氷と水とは一つなれども、氷にては手顔もあら

われぬ也。氷をとかして水となしては、いづくへなりともながし度所へやりて自由也。人の心も一所にかたまり候へば不自由也。水のごとく心を總身へ舒廣りて用なる所へやりてつかひ候。是を本心といふ也。

一
有心の心、無心の心といふ有り。有心の心といふは妄心と同事也。有心と云は何事にても一方へ思ひつむる所あり。是を有心と云なり。又無心の心と云は本心の事也。一所にかたまり定る事なく、分別も思案も何もなき時は、心は總身に舒廣りて、全骸

に行渉りたる心を無心の心といふ也。無心といふて石か木かのごとくなをいふにてなし。心に留る事

のなきを無心無念と云也。常に水のたたへたる様にして、此身に有て、用の向ふ時は出て用を叶る也。たとへば車の軸のかたまらぬによりてめぐるなり。

心も内に何事ぞ思ふ事あれば、人の云事も聞

ながら聞不覺。思ふ事に留る故なり。是心は物の有故なり。又此の心に有物をさらんさらんと思はざれ。思はねばひとりてに去ておのづから無心に成也。常に

心掛る程、後は無心の位へ行也。古歌、

一
思はじとおもふも物を思ふ也思はじとだに思わじや君心の置所といふは、敵のはたらきに心を置ば敵の働に心をとらるる也。敵の太刀に心を置ば、敵の太刀に

心をとらるる也。敵をきらんと思ふ所に心を置ば、きらんと思ふ心に心をとらるる也。我太刀に心を置ば、我太刀に心をとらるる也。我前に心を置ば、我前に心をとらるるなり。唯我心を臍の下へ押込で余所へやるなよ、

敵のはたらきに依て^{〔轉〕}点化せよと云也。是は敬の字

の位なり。修行稽古の時の位也。佛法向上の段の

ころは、我身一盃に行わたりて、全軀に舒び廣^{ひろ}

りある程に、手の入時は手の用を叶へ、足の入時は

足の用をかなへ、目の入時は目の用を叶へ、其入時

の用を叶へる也。思案すれば思案にとらるる、分別

すれば分別に心をとらるる程に、思案にも分別

にも不^レ渉して、總身に可^レ捨置^一。一所に置ば、偏におつ

るといふて一所へかたづくる也。正心といふは總身へ心を

舒て一方へつけぬをいふ也。どこに置と思ふところ

なければ、全軀に舒び廣^{ひろ}こりて有也。敵の働に

依て當位^ゝに心を所^ゝにて可^レ用也。唯一所に

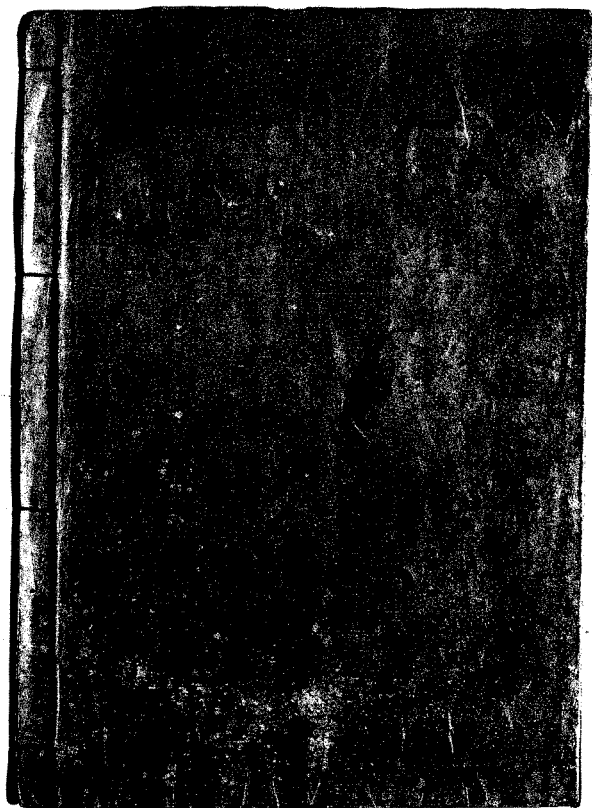
心を止め工夫、是修行也。肝要とする所也。一方に

心を置ば九方はかくる也。ころを一方に不^レ置して

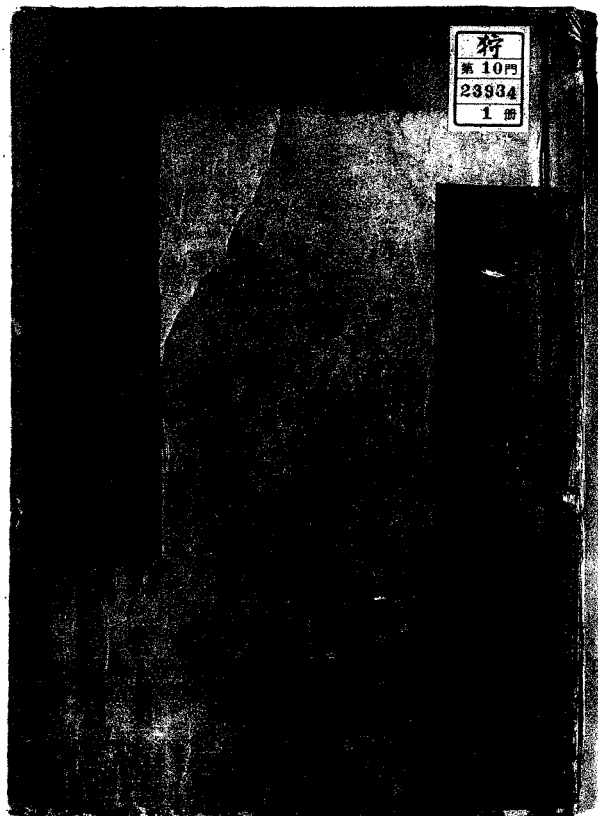
用を叶へば、十方に心は可有也。是常^はに修行

工夫肝要也。

無明住地煩惱諸佛之不動智終

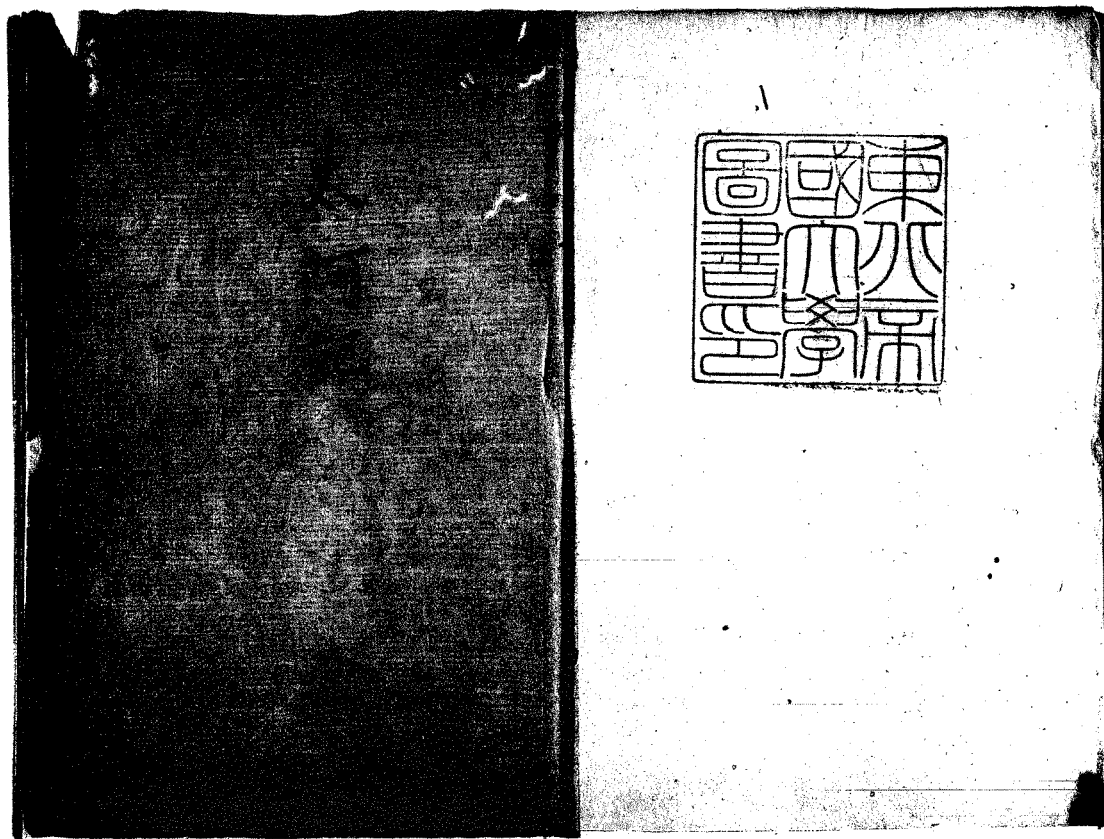


(B 裏表紙)



(B 表紙)

沢庵宗彭『不動智神妙録』古写本三種・『太阿記』古写本一種



(B₁ 『太阿記』表紙)

太阿記

蓋兵法者不爭勝負不
出一步不退一步敵不見我我不
見敵徹天地未分陰陽不到處不
須得印支通達人者不用力殺人
用刀活人要殺即殺要活即活殺
殺三昧活活三昧也不見是非而
能見是非不作分別而能作分別
踏水如地踏地如水若得此自由
盡大地人不奈何他悉同侶故
得這箇麼行住坐卧語默行茶

崇井泰德院周爾奎
以今購入元山學博士
御覽書

B₁ 『太阿記』 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本(57頁、73頁)

B₂ 『不動智』 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本(73頁、89頁)

『太阿記』

得_レ盡_レ踏_レ能_レ殺_レ用_レ須_レ見_レ出_レ蓋_レ
 這大_レ水_レ見_レ三_レ刀_レ得_レ敵_レ一_レ兵_レ
 箇_レ地_レ如_レ是_レ味_レ活_レ功_レ徹_レ步_レ法_レ
 麼_レ人_レ地_レ非_レ活_レ人_レ夫_レ天_レ不_レ者_レ
 行_レ不_レ踏_レ不_レ活_レ要_レ通_レ地_レ退_レ不_レ
 住_レ奈_レ地_レ作_レ三_レ殺_レ達_レ未_レ一_レ争_レ
 坐_レ何_レ如_レ分_レ味_レ即_レ人_レ分_レ步_レ勝_レ
 臥_レ他_レ水_レ別_レ也_レ殺_レ者_レ陰_レ敵_レ負_レ
 語_レ悉_レ若_レ而_レ不_レ要_レ不_レ陽_レ不_レ拘_レ
 裡_レ絶_レ得_レ能_レ見_レ活_レ用_レ不_レ見_レ強_レ
 默_レ同_レ此_レ作_レ是_レ即_レ刀_レ到_レ我_レ弱_レ
 裡_レ侶_レ自_レ分_レ非_レ活_レ殺_レ處_レ我_レ不_レ
 茶_レ欲_レ由_レ別_レ而_レ殺_レ人_レ直_レ不_レ

裡飯裡工夫不怠急著眼窮去窮
來直須見月鏡年久而如自然暗
裡得灯相似得無師智度無作妙
用正與麼時只不出尋常之中超
出尋常之表名又曰太阿以太阿
利劍人人具足箇箇圓成明又者
天魔怕之昧之者外道欺之我上
手與上手鋒銳相交不交勝負者
如世尊拈華迦葉微笑又或舉一
明三目機鋒兩是尋常靈明也古
人此事了畢人於一未舉三未明

前早截作三段沉顏顏相對乎
如是人終不露鋒銳具疾也電光
無通其輕也急豈無及無這般手
段繞指却著擬却著者便傷鋒把
手不足為好手以情識莫卜度也
言語所可傳無法操所可習教外
別傳法是也大用現前不存軌則
順行逆行天莫測是什麼道理古
人曰家無白澤圖無如是人怪若
人鍊得至這箇道理一劍平天下
學大者莫輕忽

学_レ人_二人_一順_レ別_レ言_二手_一段_二無_一如_レ〔以_レ前_二是_一〕
 之_二鍊_一曰_二行_一傳_二語_一不_レ纔_二拈_一却_レ輕_二終_一截_二
 者_レ得_二家_一逆_レ法_二所_一可_レ為_二好_一手_二擬_一却_レ著_二及_一無_二疾_一相_二
 莫_レ至_二無_一行_二天_一大_二無_一手_二以_一却_レ著_二及_一無_二疾_一相_二
 輕_二這_一白_二天_一大_二無_一手_二以_一却_レ著_二及_一無_二疾_一相_二
 忽_二箇_一圖_二無_一是_二現_一樣_二情_一識_二者_一便_二傷_一鋒_二犯_一手_二
 道_二理_一無_二如_一是_二麼_一天_二怪_一下_二若_一。

〔是_レ〕明_二如_一手_二天_一利_二出_一用_二裡_一來_二裡_一
 此_二三_一世_二尊_一上_二怕_一人_二常_一與_二燈_一相_二見_一月_二夫_一
 了_二機_一拈_二手_一鋒_二鉢_一之_二足_一名_二只_一得_二積_一不_二
 畢_二銖_一兩_二迦_一鉢_二者_一箇_二曰_一出_二尋_一智_二發_一無_二自_一
 人_二於_一是_二葉_一相_二交_一不_レ決_二勝_一負_二者_一上_二者_一
 一_二尋_一微_二笑_一又_二或_一舉_二一_一者_二明_一之_二阿_一超_二妙_一暗_二窮_一
 未_二拳_一三_二未_一明_二若_一。

蓋とは、知らねどもといふ義也。蓋しといふ字は、ふたと訓む字也。たとへば重箱にふたをきせて置ば、中には何を入たるにやらん知れねども、人推量すれば十が六つ七つも當る也。文の作法にしつかりと知たる事も卑下して、しらねども此理であらんかとおちつけずいひて、心得たてにいはぬ也。兵法とは字面の通り也。○不_レ争_ハ勝負_一とは、かちまけを争ふ處なし。○不_レ拘_ハ強弱_一とは、つよきよはきの働にかかはらず。○不_レ出_一一步_一、不_レ退_一一步_一とは、一足も踏出さず、一足も退かず、坐ながら勝事也。○敵不_レ見_レ我、我不_レ見_レ敵とは、我とは真我之我なり。人我の我れにあらず。人我の我は、人よく是を知る。真我の我れは人の知ることまれなり。故に敵不_レ見_レ我_一と云なり。○我不_レ見_レ敵とは、我れ人我の我見なきゆへに、敵の人我の我の兵

法を見ず。○不_レ見_レ敵といへばとて、目前の敵を見ぬにあらず。見て見ぬ處是妙也。○真我の我とは、天地未分以前、父母未生已前の我なり。此我は、我れにも他にも、鳥獸畜類草木一切の物に有る我也。即ち佛性と云もの也。故に此我は、影もなく形もなく、生もなく死もなく我れ也。去程に今日の肉眼などを以見ゆる我では無し。悟りの人よく是を見る也。其見たる人を、見性成佛の人といふ也。昔世尊も、雪山に入り給ひては、六年寒苦をへて悟り給ふ。是真我の開悟也。常の凡夫、信力なくして五年三年に知るものにあらず。学道の人、十年廿年十二時中そつともおこたらず、大信力を興して、善知識に参じて、辛劳苦勞を不顧、子を失ひたる親の子を尋る如く、志を不退、深く思ひ尋て、終に佛見法見つきはてて、自然に是を見ることを得る也。○

徹天地未分陰陽不到也。直観得功
といふも地も空もなれど法も陽といひては
此の空も眼と著るなり。知入解をてなれ能く
も中へ入るやとあるも大切と云ひしなり。人
をよめる人、世に生ずる人といふ。○不用刀殺
又といひ刀を用ゐるとさうゆふやねと人言ひ居
てさうするて己く死に候なり。人といふなり。
○用刀、活人といひ刀を用ゐるといひて敵を
ほくくして居るも人ぬていふなり。○要殺
歸殺、要殺、歸殺、殺三昧、活活三昧也とい
はれり。もねりも自由三昧也。○不見是非
而能是非、不作分別而能分別、とい
はれり。ともねりといふなり。能くも眼と人とい
はれり。

分別といふなり。眼と人といふなり。一面の法を用ゐるなり。
ともねりといふなり。○眼と人といふなり。能くも眼と人とい
はれり。もねりも自由三昧也。○不見是非、而能是非、不作分別、而能分別、とい
はれり。ともねりといふなり。能くも眼と人といはれり。
いふなり。○踏水如地、踏地如水とい
ふなり。人々本然といふなり。人といふなり。能くも眼と人といはれり。
悪者の心も強ていふなり。踏水、地のかく
なり。踏水、地のかくなり。踏水、地のかくなり。踏水、地のかくなり。
人といふなり。踏水、地のかくなり。踏水、地のかくなり。踏水、地のかくなり。
大地人、不空、何他といふなり。自由といふなり。○盡
無人、悲の天地人といふなり。試みといふなり。何といふなり。

徹_③天地未分、陰陽不_②到處_①、直_④須_⑤得_⑥功_⑦

とは、天も地もいまだ分れず、陰も陽もいまだ到らざる

以前の處に眼を著けて、知見解会をなさず、能_⑧

真直に見よと也。しからば大功を得る時節あらんか。

通達の人とは、兵法通達の人をいふ。○不_③用_④刀_⑤殺_⑥

人とは、刀を用て人をきる事を守らねども、人皆此理に

逢ては、すくんで已に死_①漢_②となつて、其人を打つ處なし。

○用_④刀_⑤活_⑥人_⑦とは、刀を用て人をあひしらうて、敵の

はたらくに任て、切らずして見物せんと_①ま_②ま_③也。○要_④殺_⑤

即殺、要_④活_⑤即活、殺殺三昧、活活三昧也とは、

活さふとも殺さふとも、自由三昧也。○不_④見_⑤是非_⑥、

而能_⑦是非をみる。不_④作_⑤分別_⑥而能_⑦作_⑧分別_⑨とは、

兵法の上には是非を見ずして、能く是非を見、分別をなさずして

分別をなす道理あり。譬へば一面の鏡を開て置ば、何もの

にても鏡の前に有物は、それぞれの形それぞれに見ゆるなり。

然れども其鏡は無心なる故に、それぞれの形はきつかとうつせ

ども、それはそれ、是は是と分別する心はなき也。兵法

つかふ人も、一心の鏡開くときは、是非分別の心、一点も

なければ、一心の鏡あきらかなるによりて、是非分別は

見ずして見ゆる也。○踏_④水_⑤如_⑥地_⑦、踏_④地_⑤如_⑥水_⑦とは、

この心は、人人本源をさとりたる人で無ふては知るべからず。

愚者の知らざる事也。強てこれをいはば、踏_④水_⑤地_⑥の如く

ならば、地を踏んで通るうへはなし。地水ともに忘れたる

体の人、よく此道理に至るべし。若此自由を得ば、○盡_④

大地_⑤人_⑥、不_④奈_⑤何_⑥他_⑦とは、かくのごとく自由を得くる

兵法人は、悉の大地の人がよりて試る事も、何とも

しやうずるやうがあるまいと也。○欲得^レ這箇^一麼^ハとは、這箇は右をさす言葉なり。右件の旨を得んとならばと云義也。○行住坐臥とは、即四威儀の事也。○四威儀とは、行くと住ると坐すると臥との四つ是也。人人の上に皆あること也。○語裡默裡とは、物がたりのうちも、無言のうちもといふ義也。○茶裡飯裡とは、茶をのむうち、飯をくふうちも也。○工夫不^レ怠、急に著^ル眼、窮去^ル窮來、直須^ル見とは、工夫を油断なくしておこたる事なく、自己に立ちかへつて、急に眼をつけて其理をきはめ来て、ただまつすぐには是は是、非は非にして、それぞれのうへで此理を見よ。○月積^ル年久とは、月もつみかさね年も幾年も経たらばと也。○如^シ自然暗裡得^ル灯

相似^トとは、如^シ此工夫をよくして、彼妙理を得る事、闇の夜に忽ち灯の光を見たるごとくに相似たらばと云義也。○得^ニ無師智^一、發^ニ無作妙用^一とは、無師の智とは、師匠もつたへぬ根本の智也。無作の妙用とは、凡夫のはたらきは皆有作となりてくるしむいとなみばかり也。無作とは、平生のしわざをなすうへが則無作にて。○世尊拈華、迦葉微笑とは、世尊、末期に靈山会上にて一枝の金波羅華を拈^テじて、八万の大衆に示し給ふ。衆みな默^然拈^テとして居たなり。只迦葉一人につこと笑ひ給ふ也。其時、世尊、迦葉の悟りを開き給ふ事を知り給ひて、吾不立文字教外別伝の正法は汝に付囑^スすと印証し給ひてより、西天には

二十八代達磨で傳はり唐土にありて六代傳り
六祖の大德禪師より六代肉身の菩薩後あり
まゝいづゝ屋を造り住居をたゞしむねありて
出家て家出無しなり玉虛堂より以來我朝
日本國大應大師より今にまで血脈不斷なり
まづこれに指掌微密の法に中著せしめて
わづかに易と容易と指しをさしむるに何れ
法儀もなしと声と願とありて心もいふに
いふべきやいふべきもいふべきと一語の
と一語のつて水と水とが合して水とありて
世も心も眼の一般の心なり甲ていふに
いふべきはいふてこそいふ指掌微密の旨と

もいふは人いふ人の中一人一人の
為最大衆の人とて人々を要て便に參せよ
三十年若わきもいふは人々を要て便に參せよ
地獄へ入るゝ衆と計るゝ可怖く又或は擧げ
明き目機鋒而して一語のてててててて
本なり目機鋒而して目程の機をいふててて
とててて其金銀は何なるや機鋒とててて
かゝるもいふ利根かゝるも利根とててて
かゝるもいふ利根とててて十分とててて
是は奇特なりとててて下下文に是の常
美利也といふ〇若是は是の事畢の人の利根

二十八代達磨まで傳はり、唐土には達磨より六代傳はり、六祖の大鑑禪師といふは、六代の肉身の菩薩なり。

夫よりいよいよ唐土にも仏法さかんにして枝葉はびこり、五家七宗出興して、乃至虛堂（きやうだう）より以來、我朝

日本國、大應、大灯より今に至る迄、血脈不斷なり。

去程に此拈華微笑の法は、中著地にいたり

がたき処也。容易に推量してしる事にあらず。

諸仏も氣をのみ声を飲ところ也。去程に此義理は

いふべきやうはなけれども、若譬を以いはば、一器の水

を一器にうつして、水と水とが合して分ちもなきが如く、

世尊と迦葉と眼の一般の処なり。甲乙はないぞ。

いかな兵法のうはてでも、此拈華微笑の旨を得

たる兵法人は、千人萬人の中に一人もなき事なれども、

若最大乗の人^{（一）}有て、知らんと要せば、更に參ぜよ

三十年。若あやまらば、兵法に達せざるのみにあらず、

地獄に入る事、箭を射るが如し。可怕（こ）く。又或は舉一

明三、目機銖両とは、一をあげて見すれば、三をあきらむ

事なり。目機銖両とは、目裡の機がさとうして、目ぶ

りやうにて其金銀は何程あらふと銖両をはかるに、

少しも違へず、利根なかたち也。銖とは、十糸を銖と

なす。両とは、十銖を分となし、十分を兩となす也。言は

譬ひ如此利根な靈利底（いんりてい）の人も、よのつね多き利根也。

是れ奇特にあらざる也。去程に下の文に、是尋常の

靈利也といえり。^{（二）}○若是此事了畢人とは、仏法の

大事因縁と云ふは、人々也。○於一未舉
三昧明已前、早截作三段といふは、
うけや三といふは、なまめさ何しきやうの疑ふを
以て、早くきりて三段して、なまめさひんといふ
ふくも、わくといふ。○況顔顔相對乎といふは、
音妙と云て、あゝ、なまめさ人々、わくといふは、
勝、まゝあゝ、なまめさ如是の人、終は不露
鋒銑といひや、れ名譽と云ふ人といふは、
太刀のけとさ、い初め終まで、えぬわ。○其
疾也、電光も無二通、其輕也、急嵐無及とい
ふは、い掃蕩も通る中、かく、わくといふは、
わく、嵐もなまめさ。○無二這般手段といふは、

大事因縁をさとりおはれる人也。○於^ニ一未^ズ舉^セ、三未^ズ明^ミ、已前^ニ、早^ク截^ツ、作^ス三段^トとは、一もいまだあげず、三もいまだあきらめざる何ともきざしの顯れざる以前におみて早くきつて三段にして置くほどに、此人にあはばなにもなるまい也。○況^ニ顏^ノ顏^ノ相對^ス乎^カとは、如^シ斯^ノはや奇妙を得て居る程に、其人と顔と相むかふては、餘りにきり安い事じやぞ。如是の人は、終に不^レ露^ス○鋒^ノ鈍^ニとは、此やうな名譽を得たる人をば、何とも太刀のほこさは初めより終まで見えぬなり。○其疾^キ也^ト電^ノ光^ノ無^レ通^ス、其輕^キ也^ト急^ノ風^ノ無^レ及^スとは、早き事は稲妻も通ずる事なく、輕き事は急に吹輕き風も及ばぬ也。○無^シ這般^ノ手^ノ段^トとは、是つう

のてがらなふてはと云義也。○纔^ハ拈^テ却^テ着^キ、擬^シ却^テ著^キとは、そつとなりとも太刀を取上て、心あてがう所^{「ふ」}に著せば惡からん。○傷^ハ鋒^ノ犯^ス手^トとは、太刀先をぶち折るとて、己が手を切る事也。○不^レ足^ル為^ニ好^シ手^トとは、此やうな人は少も上手とは云はれまい也。○以^テ情^ノ識^ヲ莫^ク二^レ卜^ス度^トとは、情識とは人心のうちの識分別の心也。卜度とは卜ひはかる也。言は情識を以て卜ひはかつては役に立ぬ事じや程に、卜度、分別をはなれて見よや。○無^シ言^ノ語^ヲ、所^レ可^ク傳^フ、無^シ法^ノ樣^ヲ、所^レ可^ク習^フとは、此真実の兵法は言葉で語り傳ふべき處もなく、又は法樣とて何所に構へて何所を打てよきと、師より習ふべき所もなきなる程に、下の文に教外別傳の法是也と云也。教外とは、師の教への外に別に自悟して、

「得」

自己自傳の法あり。○大用現前、不存軌則とは、かの別傳の一法、大用現ずれば軌則を存在せぬなり。大用とは此十方世界如何なる所にも行渡つて、うの毛の先程もはづれたる處はなき也程に大用とは云也。軌則とは、差定たるのり法度を云也。其様に物のいがたの分量のごとく、定法をば大用現前之上には存在せぬ也。○順行逆行、天莫測とは、順にやらうとも逆にやらうとも、どちへも自由に障りはないぞ。爰をば天もはかる事はならぬ也。

○是什麼道理ぞとは、是なんの道理ぞと諸人に向て拶して云也。○家無白澤圖、無如是天怪とは、

白澤とは生物也。牛に似て何とも知れぬ生きもの也。或は夢を喰ひ其外禍をくふと也。去程に唐土には、此白澤の圖を画て門に

推しつけ家の柱におす也。故に白澤の圖を推す事は、家の殃を避ん為也。然れ共家に天怪元より無き人は、白澤の圖を画て推すと思ふ心なき也。言は順行逆行共に用ひ

得たる者は、天だも測る事ならぬ程に、一切の苦業をばとびぬけて、家に殃なふて、白澤の圖を好む心もないものの境界に似て、きつぱと見事也。○若人鍊得、至這箇道理とは、若し人如形修行して、精金を千鍛百鍊して、おつとりだいやうに至り得たる解脱の人ならば、一劍平天下ほど也。

一劍平天下とは、劍一つを以て漢の高祖の天下を平らげられた如くあらん也。此一劍は、空劫以前より今日に至るまで、歴としてある也。何の劍ぞ。高く眼を付て見よ。學者、莫輕忽とは、此劍の妙理を学するもの、たやすく

魔相に思ふなよ。随分精彩をばげまいではならぬ事也。

『不動智』

無明住地煩惱。無明とは迷^{まよ}ぞ。住地は留^{とど}位^ゐぞ。佛法に五十

二位といふ事あり。其五十二位の内に物毎に心を留る所を住地と

云へり。住とは留^{とど}と云儀也。留^{とど}と云は、何事に付ても其事^{そのこと}に心を留むる

を云ぞ。兵法にていはば向^{むか}より切太刀をひと目見て、其俣^{また}其所^{そのところ}に留^{とど}まり、

向より切る拍子に向^{むか}せんと思へば、向の太刀に其俣^{また}心が止まりて手前の

働がぬけて向の人に切らるる者也。故に此心を留る位と云へり。向より

打太刀を見る事は見れども其所^{そのところ}に心を止めず、向ふの太刀を拍子に合^あて

うつとも思はず、思案分別にも涉^{あた}らず、振り上る太刀を見るといふや

心を卒^{そつ}度^とも不^ふ留^{りゅう}、其俣^{また}向の刀を追^お取^とて、還^{かへ}て向を切る刀と可^か成^{なり}也^{なり}。

是心を禪家に曰ふ、還^{かへ}把^と鎗^{しやう}頭^{とう}倒^{たう}刺^し人^{にん}来^くと云也。鎗^{しやう}は

ほこぞ。人の持たる刀を我方へ追取て、還て相手を切るといふ心ぞ。兵法

にては無刀取りの事也。向から打とも、右から打つとも、打つ人にも太刀にもほど

にも拍子にもそつとも心を留めば、手前の働皆ぬけて、人に切らるべきぞ。我

心を敵に置^おば敵に心を取られ、我身に心を置けば我身に心を取らるる也。

我身にも心を置べからず。我身に心を引しめて置も、初心の間の習に入る時

〔置く〕の事ぞ。太刀に目を付、心を置^おは所に心を取らるる故に留まる心を迷ひと

いはむ。為号^{なごう}無明住地煩惱^{むめいじゅぢぼう}矣^{なり}。○諸佛不動智。不動智とは、動か

ざる智恵ぞ。動かぬとて石か木かのやうに無性なる義理にてはなし。向ふ

べき左えも右えも、十方八方へ心は動き度やうに動きながら、そつとも止まら

ぬ心を不動智といへり。不動明王は、右の御手に劔を振り左りの御手に繩を

とり、齒をくひ出し目をいからして、佛法を妨^{さまた}ん悪魔を降伏せんとて

つつ立て御座^{ござ}す姿もあのやうなる姿なるが、いづく其世界に隠^{かく}て居らるる

にては無^レ之^ヲ。容をば佛法守護の容を作り、鉢は此不動智を鉢として衆生に見せん爲也。一向の凡夫は恐れをなし、佛法に仇をなさじと思ひ、悟りに近き人は不動智を表したる所を悟り、一切の迷ひをはらし、即不動智を明らめ得ば、我身則不動明王に成程に、此心法をよく修行したる人は、惡魔もなやまさぬとしらしめんが爲の不動明王にてこそあれ。然れば不動明王も人の一心の不^レ動處^ニを云ぞ。我が心を動轉せぬ理ぞ。不^レ動轉^ニとは物に心を止め事也。物に心を止れば、物に心をとらるるぞ。物毎に留る心を動と云なり。物を一見見ても心を不^レ留^バ不^レ動也。なぜとなれば、物に心が止れば、色^ノの分別が胸にありて、むねの中色^ノに動くもの也。留れば動き、不^レ留^バ、心は動いて不^レ動^ニぞ。譬は十人して一太刀づつ我へ切進るとも一太刀をはづし、跡は心を不^レ留捨てぬれば、十人ながら働はかけぬ也。十人に十度心は動けども一人にも心を不^レ留ば、次第にとり合て働は不^レ闕もの也。若又一人の前に

心が止まらば、一人の打太刀はぬけてもはづれもすべけれど、二人めの時は手前の働ぬけて切るべき也。千手觀音には御手が千御入御座す。弓を持たる御手も有、絡を持ちたる御手も有、劔を持たる御手も有、様々の御手御入御座す。若し弓を持たる御手に心が止まらば、九百九十の御手皆御用に立間敷也。一と處^ノに御心を不^レ留おはしますに依りて千の御手一つも御用に立ざるはなし。觀音とて御身一つに千の御手がなにしにおはしますべきぞ。不動智がひらけてこそ、御身に御手が千有ても皆御用にたつぞといふ事を人に示さんが爲に作りたる容也。喩へば一本の木に向て、其内の赤き葉を一つ見て居れば、殘の葉は見へざるなり。葉一つに目をかけずして、一本の木に何心もなく打向へば、数^ノの葉は不^レ殘見ゆるもの也。葉一つに心をとどむれば、其一つの葉に心をとられて殘りの葉は不^レ見也。一所に心を留めざれば、百千万の葉は皆見ゆるものなり。是を得心したる人は即ち千手觀音の身軀也。然るを一向の凡夫は、只一筋に御手一つに千の御手、千の御目が御座す、有難しと信じ、又なま物知りの人は、一身に千の御手、千の御目が何しにあらん、たわ言と誹謗する也。今少し物をよく知らば、凡夫の信ずるにてもなし、破る

にてもなくして、道理の上にて自然と尊び信ずるもの也。物に表し物に准じて道理をあらはす事ぞ。諸道共にけ様の物ぞ。神道などは別して其通り也。有の俛に思ふも凡夫、又打破るは猶惡敷也。其中に道理の有事ぞ。此道彼道は様々あれども、極まる所は一心の落着也。さて初心の住地より能修行して不動智の位に至れば、立歸て

元の住地の初心の位に落る子細あり。兵法にて云ば、初は身持も太刀の構も何も知らぬ物なれば、身にも心のとどまる事もなく、人が打つ追つ取あはせた許り、何の心も無し。然る處にさまざまの事を習ひ、身持太刀の取りやう心の置所、色くくの事を教へぬれば、色々の處に心がとまりて、人を打んとすれば兎に角として、還て切られなんとして、殊の外不自由也。如く此不自由なる事を、日を重ね年月を重ねて稽古すれば、後は身構も太刀の取やうも皆心になくなりて、只まづ初めの何も知らぬ何心もなき時のやうになる心もちぞ。一つから十迄かぞへめぐらせば一つと十とは隣りになるもの也。調子なども、一つの初ひくき一越数へて、上無と云高き調止へ行きぬれば、一つの下と一つの上とは隣になるもの也。

十二調止如是。

- | | |
|------------|--------------|
| 一、壹越。秋、土用。 | 二、断金。秋。 |
| 三、平調。秋。 | 四、勝絶。春。 |
| 五、下無。春、土用。 | 六、双調。春。 |
| 七、覺鐘。夏、土用。 | 八、黄鐘。夏。 |
| 九、鸞鐘。夏。 | 十、盤涉。冬。 |
| 十一、神仙。冬。 | 十二、(上無)冬、土用。 |

づつと高きとづつと下は似たる物になる也。仏法もづつと高ければ、仏とも法とも知ぬ凡夫と同じ様になりて、物知とは云とも、何も知らぬ人のやうなと人の見なす程かざりもなく何もなくなるもの也。初^のて無明住地煩惱と後は

不動智と一つに成る也。智恵の動の分皆失切て、無心無念の位に落著ぞ。

愚痴の凡夫は一向に智恵が無いほどに不出也。又づつとたけ至たる智者は、早智恵が不_レ入に依て一切不出也。なま物知りなるによりて、智恵が顔へ出るぞ。彼は是にならつて自己の私を原すべし。理の修行、事の修行と云ふ事有り。

理とは右に如_レ見、至り至つては何も取あはぬ、只一心の捨様也。段々右に書記す通りぞ。

然れ共、事の修行せざれば、道理計が胸に有て、身も手も不_レ動ぞ。事の修行とは、兵法の身構へ、五箇九箇六段等の様くの習の事也。理を知りても、

事を自由に不_レ働は不成也。又身持太刀の取廻しよくても、理の極る所くられば成まじき也。事理の二つは車の兩輪の如し。若し一片輪にては廻り難し。学者心得べし。○間不_レ容_レ髪と云事あり。兵法の体用の事の間ぞ。

喩へば物を二重合せたる際へは、髪筋も不_レ入と云義也。透間もなき

事ぞ。喩へば、手をはたと打に、其俣はしと声出る。其手の間へは髪筋の入るほどの間もなき也。間一重も置ては声出るものにてはないぞ。打

かけらるる太刀に、心がとどまれば、間が出来て其間に手前の働が抜る也。

向の打太刀と我働との間へ、髪筋も不_レ入程ならば、人の打つ太刀は

我太刀たるべき也。如_レ此留めて、物に心の残る事を、佛法にはきらひ、煩惱と

云へり。たぎつたる早川へ匏土を流すやうに、波に乗て、ぼつぽと流て

少もとどまらぬ心をた(つ)とぶ也。○石火の機と云事あり。是も前の心持なり。

石をはたと打と否や、光と出る火のごとく、打と其俣出る火なれば、

間も透もなき事也。是も心の可_レ留間のなき事ぞ。又早き事と

心得てはあしき事也。心を物毎にとどめまじと云が專要也。早くても

心の留まらぬを、専らとする也。心がとどまれば、我心を人にとらるる

なり。早くせんとして、思ひもふけて、早くせんは思ひもふくる心を、又奪

はるる也。西行の歌之集の中に、世をいとふ人としきげばかりの

宿に心とむなと思ふばかりぞ。是は江口の遊女がよみし歌なり。

独り可_レ得_レ心歌也。はや心とむなと思ふばかりが心得處也。又是にて

合点可_レ有。禅宗にて如何是佛と問ふ声の未_レ絶先に手をはたと

打つべし。又如何は禅と問ば、拳を指あぐべし。又如何は佛法

の極意と問ば、其聲の未_レ止に、一枝梅花となりとも、庭前の

柏樹子となり共云べし。いふ事の善悪を撰ぶにてはなし。不_レ留心を

尊ぶ也。不_レ留心は色にも香にも、移らぬ也。此不_レ移心の鉢を神とも

佛とも尊ぶ也。禅心とも至極とも云也。ぐとぐと、思案の後に

云ひ出すは、金言妙句にても住地の煩惱也。石火の機と云も電光

の機と云も、光りとする、稲光りのする際に動くを云也。喩へば右衛門と

よびかくるに、をつと答る心を不動智と云也。右衛門とよばれて何の用にてか有らんと、思案して後に何用などといふころをば住地煩惱といふ也。然^わば、右衛門が心得やう也。留りて物に動かされ迷はさるる心^をば、無明住地煩惱とて凡夫也。又右衛門と呼ばれてをつと答るは、諸仏の智也。然れば、佛と衆生と二つなし。神と人と二つ無し。此心得^明なるを神とも佛とも云。神道歌道儒道とて道多くあれども、此一心の明かなる所也。然れ共、かやうに書付ること唯言葉にて、心を向上にしたる分也。此心人人我身に有て、夜昼善き事惡き事ともに、此心の事により、家を離れ國を亡し、其身の程々に隨ひ、善惡共に、心の業にてあれ共、此心をいかなるものぞと悟り明らむる人なくて、皆心にまどはさるる也。世の中に心を説く人は有べし。能く明らむる人はまれにもある事難し。たまたま明らめ知りても、亦行ふ事有がたし。此心をよく説とて、明らめたるにてはあらじ。喩へば水のことを能く講釈するとも、口は、ぬれまじ。火を能く説とても、口は熱からず。誠の水、誠の火はふれてならでは、知れ

ざる也。書を講釈したるまでにては、知れまじき也。食物をよく説くとて、ひもじき事あるに、なをりは、すまじき也。説く人の分にては知れまじき也。世の中に佛道にも儒道にも心を説く人はあれども、其説く事を其人の身持無し。心を明らめ知る人は、まれにも無しと見へたり。書の上にては、知れぬもの也。人人我身にある一心本来の面目を、得み極め悟らねば不明也。又參學^{えんがく}をしたる人が心明かなら(ね)ば、參學する人も、多けれ共、それにも依らず、參學したる人の心得皆く惡し。此一心の明かなるやうは、深く妙徳の工夫の上より出るもの也。○心の置所。心をいつくに置ふぞ。敵の身の働に心を置ば、敵の身の働きに、心をとらるる也。敵の太刀に心を置ば、敵の太刀に心をとらるる也。敵を切らんと思ふ所に心を置ば、敵を切らんと思ふ所に心をとらるる也。我太刀に心を置ば、我太刀に心をとらるるなり。我れ切られじと思ふ處に心を置ば、切られじと思ふ處に心をとらるる也。人の構へに心を置ば、人の構に心をとられ、我が身の構へに心をおけば、我身の構に心をとられる也。兎角心の置所が無しといふ。○或人の云、我心をよ所にやれば、

心の行く所に心をとられて、敵に負る程に、我心を臍の下へ押込て余所へやらずして、敵の働によつて轉化すべきといふ。尤きもあるべき事也。然れ共、向上の段より見れば、心を臍に押込てよ所へやるまじきと云は段がひきし、向上にあらず。修行稽古の時の位也。敬の字の位也。

又は孟子が放心をもとめよと云位也。立ちあがりたる向上の段にてはなし。敬の字の心持也。放心の事は、別に記す。臍の下へ、押込て、余所へやるまじとすれば、やるまじきと思ふ心に心をとられて、先の用が虧て、殊の外不自由也。兎角此心の置處なし。或人問て云、心を臍の下に置も、先の用が虧ぬ不自由也。然れば、我身に、どこに是心を置ふぞ。迷はしいかなやと頭を手がいて、耳をかたぶけ、もくぜんたり。

○我答云、どこにもなをきそ、どこにもおかねば、我身に、一盃に行渡て、全軀身に延び廣がりて、大心に成る也。手足の指、目口鼻、毛一筋の下に迄も行渡らぬ所もなく、延廣である程に、手の入る時は手の用を叶へ、足の入時は足の用を叶へ、その入る所々に行渡て有ほどに、其人の入所々の用を叶へる也。万一若し一所に定て置たらば、一所に心をとられて、用は皆かくるもの也。思案すれば、思案にとられ、分別すれば分別にとらるる程に、思案にも分別にもわたらずして

心を總の身に捨て置き。一所に不_レ留して其所く有て、用ゆ。はづさず叶ゆべし。心を一所に置ば、偏に落ると云也。偏とは一方へ片付きし事ぞ。正とはどこへも行渡た事を云也。正身と云は、總身へ心を伸て、一方へ付けぬを云へり。心方の一所へ片付て、一はかくるを偏身と云へり。万事諸道共に、偏を嫌ふ事如_レ此。心を一方へ置ば、九方は虧る也。一方へも置ずば、十方は虧ざるもの也。故に臍下に引しめて置心は、喩は、繋ぎ猫にして、余所へやるまいとするが如し。殊の外窮屈にして不自由な事也。唯偏に不_レ留。心の工夫修行肝要也。心をば遍身に捨て置き。不_レ置所にも、心は有もの也。余所へは往なざるもの也。○本心妄心と云ることあり。本心とは一所に不_レ留して、全身全軀に延びひろがりたる心也。妄心とは何ぞ思ひ、一所にかたまりたる心也。本心が一所に集りかたまりてこそ、妄心とはなりて本心を失ふものぞ。本心を失ふ故に所々の用が虧る也。失なはぬやうにするが肝要也。喩へば本心は如_レ水、妄心は如_レ氷。水と水とは一なれ共、氷にては手も顔もあらはれじ。氷をとかして水となし、何へも流したきやうに流し、手足をも、何をも洗ふべし。人の心を一所にかため、一事に留りぬれば、堅き氷の如く、不自由にて遣はれぬもの也。心をとかして、如_レ水総身に延びひろがりて、十方八方へ

遣り度ままに遣りて、つかふべきもの也。是本心の圓なるいひ也。

○有心無心といふ事あり。有心とは、右の妄心と同じ。何事にても、一方に思ひ詰る事有て、分別思案を生じ、ぐどぐどする事ぞ。心に物があれば一所に留りて、自由に働かぬ事也。無心とは本心に同じ。

一所にかたまり定る事なく、分別思案何も無き時は心遍身に

行渡て有物也。喩へば水の湛へたるやうにして、此身に中つて用の向ふ

時に出して、用を叶ゆるを云へり。車は軸が、かたまりぬによりて

めぐる也。内一所につまり、かたまりたらば、めぐるまじき也。留まれば

心に物あり。心に物あるときんば、有心と云。留る所なければ心に何も

なし。何もなければ無心無念とも云。如_レ此の心法に徹する刻んば、

一事に不_レ留、一事を不_レ虧也。有心にして心の中に何ぞおもふ

事あらば、人のいふ事をも、聞ながら不_レ覺、見れども見えず、食へ

ども不_レ味。是心に物ある故也。此有る物を去りぬれば、無心にして

只用の時許動て、其用に中るべし。又此心に有ものを去らん／＼と

おもふ心が、又心の内の有り物に成る程に、是を去らん／＼とも思はざれば、

独り去て自から無心と成る也。常に心に有れば、いつとなく後は独り其位へ

行べき也。急にやらんとすれば、行ぬもの也。古歌に、

○思はじと思ふも物を思ふかな思はじとだにもおもはじや君

○水上打_ス胡蘆子_{コロロ}、捺_ナ著_ツ即轉_{ゾク}。胡蘆子捺著すとは、

手を以て、おすこと也。ふくべを水へ入れて押せば、ひよつくひよつくと

脇へ退き、わきへのき、何としても一所にとどまらぬものなり。

至りたる人の心は、そつとも物に留らぬ事、水上のふくべを押す如く

也と云也。

金剛經曰_ク、應無所住而生其心。此文を觀するに、万の

わざをするに、しやうと思ふ心が生ぜねば、手も不_レ動。心生して

すれば、其のする事に、心が留まる也。然る間留る所なふして心を

生ずべしと也。心が生ずれば、生ずる處に留る。生ぜざれば手も行

かず。行けば其所に留。心を生じて其事を為しながら、留まるところ

なきを諸道の名人とはいふ也。佛法に此留る心から、執著のこころ

發り、輪廻も是より發る。此留る心生死のきづと也。花紅葉を

見ても、花紅葉と見る心は生じながら、其所にとどまらぬ心を專と

する也。

○慈圓和尚の歌、〔二本には慈恵とあり。〕

柴の戸に匂はむ花は、さもあらばあれ、詠てけりな、うらめしの身や。

花は無心に匂ひぬるを、我はこころを花にとどめて詠けるよと身の色に

そみたる心をうらめしと也。詠たり共、心をとめずば、とがは有まじけれども、見れども聞けども一所に心をとめぬを至極とする也。敬之字を主一無適と注せり。心を一所にとりさだめん、余所へ、ちらさず、一切の事をするに其業一つを主とつて

余所へ心をやらず、後より抜て切るとも、切る方へ、心をやらぬを敬と云。尤肝要の理ぞ。殊に主君などの御意を承候事、敬の字のこころ眼たるべし。佛法にも敬の字の心有る也。一心不乱と説給ふ、

是敬の字の心也。又敬白の鐘を鳴らすとて、鐘を三つならし、手を合せ敬白す。夫れ佛と唱へあげて、此敬白の心、即ち主一無適と一心不乱と同義也。然れども佛法にては、敬の字のこころは至極の處にてはなき也。我心をとらへて、みださぬやうにと習ひに入る、修行稽古の位ぞ。應無所住の文の心は向上至極の

位なり。稽古年月積りぬれば、心をいづかたへも、追放しやりても自由なる位へ行く心也。敬の字の心は、心の余所へ行を、引留てやるまい、やれば乱れと思ひて、そつとも油断なく、心を引詰て置く位也。

是は當座心を不散、一旦の事也。常に如此ありては不自由なる事也。喩へば鶏の子をとらんとて、猫の縄を常に引詰て居てはなさぬ位にて、我心を猫をつなぎたるやうにして不自由にては、用が心のままになるまじき也。猫によくしつけをして置て、縄少しは押放して、

行く処へ遣りて、鶏と一つに居ても鶏を取らぬやうにするを應無所住而生其心の心の心也。我心を放し猫のやうにして打捨て置て、行たき所へ行ても、心の滞らぬやうに心を用るぞ。一所に定て置ては不自由にてはたられぬ也。兵法の所作にて云ば、太万をば、打かけよ、打手に心なとどめそ。一切の打手をば、はづして、うつて人をきれ。人に心を置な。人も空、我も空、打つ手も空、打太刀も空と心得よ。空に心は、留まる

まいぞ。鎌倉の無學祖元禪師の大唐の乱にとらへて切らるる時に、無学の電光影裡截春風と云頌を作られたれば、太刀を捨て走りたると也。無學の心は、太刀をひらりと振り上げたるは、電の如くよ。電光のぴかりとする間ぞ。何の心も何の念もないぞ。打太刀も心は無し。我身にも心は無し。切らるる我も心は無し。切る人も空、打太刀も空、うたる我も空なれば、打人も人に

あらず、打太刀も太刀にも非ず。打るる我も我にあらず。但電光のぴかりとするうちに、春の空を吹風を切つた如く也。一切とどまらぬ心なり。風を切たらば太刀に覚へもあるまい。かやうに心をわすれ切て万の事をする、上手の位也。舞をまへば、手に扇を取り足を踏む。

其手足を、能くせん、扇をよくまはさんと思ふ。忘れきらねば上手とは云まひぞ。未手足に心がとどまらば、事は面白かるまじき也。

悉く皆心を捨てきらずしてする所作は、あしきもの也。

○寛放心、心要放。寛放心とは、孟子が云へる事ぞ。

はなれたる心をたづね求めて、我身へかへせと云へる心也。喩へば大猫雞のはなれて、余所へ行ば、尋求て、我家へ返す。心は身のあるじなるを、悪道へ行けば、心が留るを何とて求て返さぬかと云也。尤斯く有べき義也。然れども、又邵康節が之心要放は

はらりとかはる也。心持は、心をとらえつめて置ては、繫れ猫のやうにて身が働かぬぞ。物に心は留らずして、しまぬやうに能つかひなして、心を捨て置て、いづくへなり共押放せと云義也。物に心が染み留まるによりて、入するな、とどまらするな、我身へ、もとめかへせと云は、未だ初心稽古の位也。蓮の泥染ぬものなれば、泥有ても、不苦、能く磨きたる水晶の玉は、どろの中へ入ても、染ぬやうに、心をなして、行たき所へやれ。心を引つめては、不自由也。心を引しめて置も初心の時事ぞ。一期其分では、上段へは終に不登して、下段にて果す也。稽古の時、孟子が云心を求めよと云心持也。至極の時、邵康節が之心要放良也。

中峰和尚の語に具也。中峰の放心も邵康節が之心を放ん

事を思へと云たると同意也。放つ心をもて、引とめて一所に置なと云義也。又具三不退轉云。是れも中峰の言也。退轉せず、常に

かはらぬ心をもてと云心の義也。人毎に一度二度はよい圖へ行けども、又つれて常にない程に、よい圖を仕堅て退轉せぬやうなる心をもてと云事也。

急水上打毬子、念念不三停留と云ことあり。急にたぎつて

流れる水の上に、手まりを投れば、波に乗て、ぼつぽと不三留流れる也。其如く念の一所に止まらぬ事也。

○前後際断と云事あり。前の心を不三捨、又後の心をあとへ残す事悪し。前と今との間を裁切て除、今の心をあとへ不三繋、たち切て去れよと云心也。故に前後際断と云也。

右澤菴和尚製之授于柳生但馬守者也。安永三年九月に寫之とある。于時文化五辰年三月野上先生より借讀、同四月三日反。黄昏寫終。

C 『沢庵和尚柳生但州^江兵法問答』 国立公文書館内閣文庫本

(91頁～139頁)

『沢庵和尚柳生但州^江兵法問答』

無明住地煩惱

無明とはあきらかになしと申文字にて候。迷を申候。住地とは、止る位と申文字にて候。仏法修行に五十二位と申こと之候。其五十二位之内に、毎物に心の止る所を住地と申候。住は止ると申義理にて候。止ると申は、何事に付ても其事に心の止るを申候。貴殿之兵法にて申候はば、向より切太刀を一目見て、其俣にそこにて合んと思へば、向ふの太刀に其俣心が止りて、手前の働が

抜候て、向の人に切られ候。是を止ると申候。打太刀を見る事は見れども、そこに心をとめず、向の打太刀の拍子に合て、打ふとも思はず、思案分別を残さず、振上る太刀を見ると否や、心を卒度止めず、其俣付入て向の太刀に取つかば、我を切らんとする刀、我方へおつ取て、還て向を切刀となるべく候。禅宗には、是れを還把鎗頭倒刺人来と申候。鎗はほこにて候。人の持たる刀を我かたへ還取て、還て相手を切と申心にて候。

貴殿の無刀と被仰候事にて候。向から打とも、左から討とも、打人にも打太刀にも、程にも拍子にも、卒

度も心を止めば、手前の働は皆抜候て、人に切られ可申候。敵に心置ば、敵に心を取られ候間、我身にも心を置べからず。我身に心を引しめて置も、初心の間習入候時の事なるべし。太刀に心をとられ候。拍子合に心を置ば、拍子合に心を取られ候。我太刀に心を置ば、我太刀に心を取られ候。是皆心の止りて手前拔殻に成申候。貴殿御覚可有候。仏法と引當て申にて候。仏法には、此止る心を迷と申候。故に無明住地煩惱と申事にて候。

諸佛不動智

として事なる不動なることす。よ久富もこの智
 智魚の智もこれ不動。……石の木の中にも
 性なる義理……なるい句（もたうも左もす分
 （心動動なる）に動き……年なも止ぬと
 不動智……不動用事……石の不動
 梅のたのふ縄と……齒と喉……目といか
 が、何法婦人馬鹿と海狗も……はのそ
 病も……染もあのみ……何金の世界なり
 病……病……い……を……無常無常無常
 の形を作り物……の不動智と非……存在

[illegible]

と申事は、不動とはうごかずといふ文字にて候。智は
智恵の智にて候。不動と申て、石か木かのやうに無
性なる義理にてはなく候。向へも、左りへも右へも、十方八方
へ心は動度やうに動きながら、卒度も止らぬ心を
不動智と申候。不動明王と申て、右の手に剣を
握り、左りの手に繩を取て、齒を喰出し、目をいから
がし、仏法妨ん悪魔を降伏せんとて、つつ立て
居られて候。姿もあのよふなるが、何國の世界に
隠れて居られ候にてはなし。容をば仏法守護
の形を作り、躰をばこの不動智を躰として、衆生に

見せたるにて候。一向の凡夫怖をなし、仏法に仇をなさ
じと思ひ、悟りに近き人は、不動智を表したる

所を悟り、一切の迷ひを晴し、即不動智を明らめば、

此身則不動明王程に此心法を能執行したる

人は、悪魔もい^なやまさぬぞと知せん爲の不動明王に

て候。然れば不動明王と申も、人の一心の動かぬ所を

申候。我身を動轉せぬ事にて候。動轉せぬとは、物毎に

留ぬことにて候。物一目見て其心を止めを不動と

申候。なぜになれば、物に心が止り候へば、いろいろの分別が
胸に候間、胸の内に色ゝに動き候。止れば止る心は

動てもうごかぬにて候。譬ば十人して一太刀宛我へ太刀を入るるも、一太刀を請流^{「し」}いて、跡に心を止めず、跡を捨て跡を捨候はば、十人ながらへ働を欠ぬにて候。十人十度心は働け共、一人にも心を止ずば、次第に取合て働は欠け申間敷候。若又一人の前に心が止り候はば、一人の打太刀をば打流べけれども、二人めの時は手前の働拔可申候。千手観音とて手が千御入候。若弓を取手に心が止らば、九百九十九の手は皆用に立申間敷候。一所に心を止めにより、手が皆用に立なり。観音とて身壹つに千の手が何しに

可有候。不動智が開らけ候へば、身に手が千有りても皆用に立と云事を人に示さんが爲に作たる容にて候。譬へ(ば)一本の木に向て、其内の赤き葉一つ是を見て居れば、残の葉は見へぬなり。葉ひとつに目を懸ずして、一本の木に何心もなく打向候へば、數々の葉残らず目に見へ候。葉一つに心を取られ候はば、残りの葉は見へず、一つに心を止めねば、百千の葉みな見へ申候。是を得心したる人は、即千手千眼の観音にて候。然を一向の凡夫は、唯一筋に身一つに千の手千の

眼が御座す難有と信候。またなまもの知りなる人は、身ひとつに千の眼が何しにあるらん、虚言よと破り譏る也。今少し能知れば、凡夫の信ずるにてもなく、破るにてもなく、道理を上にて尊信し、仏法はよそへ物にして道理を顕す事にて候。諸道ともにけ様の物にて候。神道は別して其道と及見候。有の俛に思も凡夫、又打破れば猶悪し。其内に道理有事にて候。此道破道様「彼」に候へども、極所は落着候。扱初心の住地より修行して、不動智の位に過れば、立歸て住地の初心の

位へ落つく子細御入候。貴殿の兵法にて可申候。初心は身持も太刀の構へも何も知らぬものなれば、身に心の止る事もなく、人が打候ば、つい取合たばかり何の心もなし。然處にさまざまの事を習、身持太刀の取様、心の置所、色々の事を教へぬれば、色々の所に心が止り、人を打んとすれば、兎や角して殊の外不自由也。如是不自由成事を日を重ね年月をかさね稽古すれば、後は身の構も、太刀の取様も、皆心になく成りて、唯だ最初の何も知らぬ何もなき時のやう也。是初と終と同じ

やゝなるをねて一ふ十進かき(すゑに)と
十と隣りありて調子なるも一のうめひを
かき(ゝ)よき(ゝ)も(ゝ)も調子(は)出(る)二の(は)
一のよ(き)隣(り)あり(て)も

一、新、二、新、三、調、四、勝、五、

六乃綱 七龜陸 八乃年 九雷打 十盤海

王祿仙 十二上

つゝと、商賣も仕商といふやうに、似きものゝ、
 俗にも、仕つたやうに、佛にも、法も、知つた人の
 やうに、人の心を、佛も、何となく、感あ

けいこ移す初の時世乃す明く煩惱後の不勤
 移す一ひも成つて智恵佛の心を失くせん
 平念の位は善有るも愚常の位より下なり
 善が位は智恵の位より上なりけしむたけぬる智
 恵は卑らうと云ふより一切の位より上なり
 智恵より上りて智恵より下りてなりけしむ
 今時の出家の作法とも怪なりて是は法
 かゝる一理の故に業の故に事の時
 左右より去りてゆくは何と云ふは唯二
 心の捨てしむるは去りてゆくは唯二

やうになる心持にて、一から十迄かぞへまはせば、一と

十と隣に成り申候。調子なども、一のはじめのひきし一を

かぞへて、上無と申高き調子へ行候へば、一の下と

一の上とは隣に成り申候。

一、壹越。二、断金。三、平調。四、勝絶。五、下無。

六、双調。七、鳧鐘。八、ワクセキ。^{〔ウシ〕}九、鸞ケイ。^{〔鏡〕}十、盤渉。

十一、神仙。十二、上無。

づつと高きと、づつとひきしは似たるものに成申候。

仏法もづつとたけ候へば、佛とも法とも知らぬ人の

やうに人の見なす程に飾りも何もなく成もの

にて候。故に初の住地の無明と煩惱と、後の不動

智とが一つに成つて、智恵働の分は失せて、無心

無念の位に落着申候。愚痴の凡夫は、一向に智

恵がなき程に出ぬ也。またづつとたけ至たる智

恵は、早ぢる^不所^入によりて一切出ぬなり。^ま生物知

り成によつて、智恵が顔へ出申候ておかしく候。

今時分の出家の作法ども、嘸おかしく可思召候。御恥

かしく候。一、理の修行、業の修行と申事の候。理

とは右に申上候ごとく、至ては何も取あはず、唯一

心の捨てやうにて候。段々右に書付候如くにて候。

解ても車の修りとははるばる行程の
有る者ともも不働の車の修りとも
其法ともも不働の車の修りとも
其法ともも不働の車の修りとも
其法ともも不働の車の修りとも
其法ともも不働の車の修りとも
其法ともも不働の車の修りとも
其法ともも不働の車の修りとも

圓不容髮

と云ふ車の不働の法は、髪を剃る、すなわち圓を

物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を
物と云ふ、は合る圓に、髪を剃る、すなわち圓を

然れども事の修行を不仕候えば、道理計胸に
有て、身も手も不働候。事の修行と申候は、貴殿の
兵法にてなれば、身構の五箇三字^{「字」}のさまざまの
習事にて候。理を知りても事の自由に働ら
かねばならず候。身持太刀の取まはし能候ても、
理の極り候所の闇く候はば成間敷候。事理の二つは、
車の輪のごとくたるべく候。

間不容髪

と申事の候。貴殿の兵法に譬へて可申候。間とは、
物を二つかさね合たる間へは、髪筋もいらぬと申儀
にて候。たとへば手をはたと打に、其俣はしと聲
が出候。打手と聲の間へ髪筋の入候程の間もなく
聲が出候。手を打て聲が後に思案して間を
置て出申ものにてはなく候。打と其俣聲が出候。
人の打申たる太刀に心が止り候へば、間が出来候。
其間に手前の働ぬけ、心が止るゆへにて候。向の打
太刀と我働との間へは、髪筋も不入候程ならば、
人の太刀は我太刀たるべく候。禪の問答に此心
有事にて候。佛法にては、此止りて物に心の残る

事と雖も教より止むと煩惱をいふにきり
なる事門にも教を流すやにあらざる
情も少しも止むべからざるなり

石火ノ機

と事いふは是も前の心持なりと云ふとせむ
いふやきりと出づ火のめりて其後出る火
出たりと遠るもなき事といふ是も心の止
なきるの事なりといふ早き其中心の
處を公と物より止る故といふ論なり

もあつたの止ぬ所と論するは止むと神を
人ふ所なりと云ふ論なりといふ情なりと云
ふい情なりと云ふと其面の神なり

世といふ人といふは其の面なりと云ふなり

と云ふいははの性女の性なりと云ふと神の性なり
なりと云ふ可なりと云ふ止むと云ふなりと云ふ
又是もその性なりと云ふ性なりと云ふ何は性
なりと云ふなりと云ふなりと云ふ何は性の性なり
なりと云ふなりと云ふなりと云ふ何は性の性なり

事を嫌申候。故に止るを煩惱と申候。たてきつたる早川へも玉を流すやうに乗つてぼつぽと流れて少も止る心なきを尊び候。

石火之機

と申事候。是も前の心持にて候。石をはたと打といなや光りと出て、火の如く打と其俣出る火なれば、間も透間もなき事にて候。是も心の止るべき間のなき事を申候。早きことと計心得候へば悪敷候。心を物に止め間敷と云ふが詮にて候。早き

にもこころの止らぬ所を詮に申候。心が止れば、我心を人に取られ申候。早く詮とおもひ儲て早くせば、思ひ儲る心に又心を被奪候。西行の歌に、

世をいとふ人とし聞ばわか仮令の宿に、心止なとおもふばかりぞ

と申歌は、江口の遊女の讀し歌也。歌を我と獨心得られ候て可然候半か。心止なと思ふ計ぞ、心得所可為候。

又是にて御合点可有候。禅宗にて如何是佛と

問候はば、拳をさしあぐべし。如何佛法の極意と

問はば、その聲いまだ不絶に、一枝の梅花と成とも

庭前之白樹子とも云べし。云事の吉凶を撰ぶ

にてはなし、留らぬ心を尊ぶ也。止らぬ心は色

にも香にも移らぬなり。此移らぬ心の鉢を

神ともいわぬ仏とも尊び、禪心とも極意とも申候

えど、思案して後に云出し候へば、金言妙句「にても」

住地煩悩^悩にて候。石火の機と申も、光とする稲

光のはたらくを申候。譬へば右衛門と呼び懸ると答ふ

るを不動智と申候。右衛門と呼ばれて、何の用

にてか可有などと思案して跡に何の用抔いふは、

心は住地煩悩^悩にて候。然れば右衛門と申ものの心得やうにて、

止りて物に動れば迷はさるる心を無明住地煩

悩とて凡夫にて候。亦右衛門と呼ばれて、をつと答る

は諸佛智なり。然れば仏と衆生とふたつなく、

神と人と二つなく候。此心の如くなるを神とも仏とも

申候。神道、歌道、儒道とて道多く候へ共、皆この

一心の明かなる所を申候。言葉にて心を講釈したぶん

にては、この一心人々我身にあたりて、晝夜善事

悪事とも業により家を離れ國を亡し、其

身の程々に随ひ、よしあしともに心の業にて候

えども、此心を如何やうなる物ぞと悟り明らむる

人うつくしき事やあるは世の中より知れぬ
人とうきふ能はざるありて稀なるはかき
及ふ通りの知事とてまじひは事難成
此一と能はざるを問ひのたふしに返る
おのれ水の手能はるは水は建ち只湯ま
しめ水と能はざるもは知れぬは識の水定
の火をさすくなくをい知れぬとの事
後教あるは世より知れぬは食物をさ
はさすもい知れぬ事あるは人のかう
知れぬは名ある世の中より得たるは偏なる

人のかうは世より知れぬは名ある世の中より得たるは偏なる
や後教あるは世より知れぬは食物をさ
はさすもい知れぬ事あるは人のかう
知れぬは名ある世の中より得たるは偏なる
よかり世よりい

心く世所

心と世國の世より知れぬは名ある世の中より得たるは偏なる
よかり世よりい

人なく候て、皆心に惑され候。世の中に心を知らぬ人は可有候。能あきらめ候之人は稀にも有がたく及見候。適明らめ知事も、また行ひも候事難成。此一心を能説とて、心を明らめたるにては有間敷候。水の事能講釋致し候迎も、口は濡れ不申候。火を能説とて、口は熱からず。誠の水、寔の火有、ふれてならでは知れぬもの也。書を講釋したる迄にては知れ不申候。食物をよく説とても、ひだるき事直り不申候。説人の分、皆知れ申間敷候。世の中に佛道も儒道も心を

説人候え共、其説如く其人の身持〔なく候。心は明らかに知らぬ物にて候。人々我身にある〕一心本來を得

と極め悟り候はねば不明候。又參學をしたる人は心が明らかならねば、參學する人も多く候へ共、それにもよらず候。參學したる人心持皆々惡敷候。此一心の明らめやうは、深く工夫の上より出可_レ申候。

心之置所

心を何國に置ふぞ。敵の身の働に心置ば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心置ば、敵の

太刀に心を取らるる也。てきを切らんと思ふ所に心を置ば、敵を切らんと思ふに心を取らるる也。我太刀に心を置ば、〔我太刀に心を取らるる也。我切られじと思ふ所に心を置ば、〕

切られじと思ふ所に心を取らるるなり。人の

構に心を置ば、〔人の構に〕心を取らるる也。兎角心の置所はないと云。或人問、我心をとかく余所へやれば、心の

行所に心を取止て敵に負るほどに、我が心を臍の下に押込で余所へやらずして、敵の働きにより轉化せよといふ。尤きも有べき事なり。

然ども佛法の向上の段よりみれば、臍の下に押込でよそへやらぬといふは、段がひきし。向上に

あらず。修行稽古の時の位なり。敬の字の

位也。又は孟子が放心を求めよと云たる位也。

上りたる向上の段にてはなし。敬の字の心持

なり。放心の事は、別書に記し進_レ之。可_レ有_三

御覽_三候。臍の下に押込んでよそへやるまじきと

すれば、やるまじきと思ふ心に心を取られて、

先の用かけ、事の外不自由になる也。ある人

問ふて云は、心を臍の下に押込んで働らかぬも

不自由にして用が欠ば、我身の内にして何所

にか心を可置ぞや。答曰、右の手に置ば、右の

もたれどなう用たてを眼さむ眼ふ
 石まて石のたふは石の足ふは石のたふは
 くられたるの用たてなり何國なり新小
 阿彌余の方の用いばたては別たを宗
 小可、面々神意固まりてなりなりなり
 重なる神方小一なりはなりなりなり
 延びたりてなり神なりなりなりなり
 とかき足の内は足の中なり一目の内は
 目の目なりなりなりなりなりなりなり
 是入りの用なりなりなりなりなりなり

くと重なりなり新小なりなりなりなり
 思ふ事なりなりなりなりなりなりなり
 分別ともあはれなりなりなりなりなり
 留まりなりなりなりなりなりなりなり
 叶ふなりなりなりなりなりなりなり
 偏は一方なりなりなりなりなりなり
 一もなりなりなりなりなりなりなり
 伸く一なりなりなりなりなりなりなり
 一方のたてを偏なりなりなりなりなり
 思ふなりなりなりなりなりなりなり

手に取られたり。用欠る也。心を眼に置ば、眼に取られて身のやう欠申候。右の足に心を置ば、右の足に心取られたり。身の用缺るなり。何國なり共一所に心を置ば、余の方の用は皆欠る也。然則ば心を何所に可置ぞ。我答曰、どつこにもなく、どつこにも置ねば、我身に一ぱいに行わたりて、全身に延ひろがりてある程に、手の入時は手の用をかなへ、足の入時は足のやうを叶へ、目の入時は目の用を叶へ、其入所_こに行渡りて有程_{ほど}に、其入所_この用を叶ふる也。万一もし一所に定て

心を置ならば、一所にとられて用は欠べき也。思案すれば思案に取らるる程に、思案をも分別をも不殘、心をば總身に捨置、所_こに留ずして、其所_こに有て用をば^外答さず叶ふべし。心を一所に置ば偏に落るといふ也。偏とは一方へ片付たる事をいふ也。正とは何所へも行渡つたる事なり。正心とは總身へ心を伸て一方へ付ぬを云也。心の一所に片付て一方は欠るを偏心と申也。偏を嫌申候。万事に堅つたるは、偏に落る逆、道に嫌申事なり。

何所に置思なければ、心は全躰に伸ひろりて行渡りて有もの也。心をば何所にも置ずして、敵の働によつて當位々々心に心をその所々にて可用心歟。總身に渡つてあるをば、手の入時には手に〔有〕心を遣ふべし。足の入時は足に有心を遣ふべし。一所に定て置たらば、其置たる所引出し遣んとする程に、そこに止て用がぬけ申也。心を繫猫のやうにしてよそへやるまいとて、我身に引留て置ば、我身に心を取らるるなり。身の内に捨をけば、よそへはいなぬ物

なり。唯一所に止ぬ工夫は皆修行なり。心をばどつこにもなをいそといふが眼也、肝要なり。どつこにも〔置ねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、心を一方に〕置けば、九方は欠るなり。心を一方に置ざれば十方にあるぞ。

本心、妄心

と申事の候。妄心とは要心^{〔悪〕}にて候。本心と申は、一所に留らず、全身全躰に延廣りたる心にて候。妄心は、何ぞおもひ詰て一所に堅り候は、心にて本心が一所へ堅り集つて妄心と申ものに

破く居るやふい共や而の用りたる様
 多ふやふきやふ本より整ふいふ水や
 一割同くもあふ水のやふい水や
 いふも改て保まふ水やふい水や
 何れも保まふやふい水やふい水や
 保く人のも一所より保く一事より保り
 二の水やふい水やふい水やふい水や
 多ふの流るやふい水やふい水や
 水の流るやふい水やふい水やふい水や
 水の流るやふい水やふい水やふい水や

有るんをん心

とも事のいふやふい水やふい水や
 有るいふやふい水やふい水や
 一方の思ひ流る所やふい水やふい水や
 有別と保くすはる流るまのんをんをん
 のんをんをんをんをんをんをんをん
 事のいふやふい水やふい水や
 有る延廣く金物やふい水やふい水や
 ともいふやふい水やふい水やふい水や

成て居申候。本心は失候と所々の用が欠る程に、失ぬやうにするが本心なり。譬へば本心は水の如く一所に留らず、妄心は水の氷の如くにて候。氷にては手も頭も洗れ不申候。氷をとかして水となし、何國へも流れるやうにして、手足をも何をも洗べし。人の心一所に堅り一事にとどまり候へば、氷かたまりて自由に遣はれ不申候。氷にて手足の洗れぬごとくにて候。心をとかして總身へ水の延るやうにもちひ、十所へ遣り度ままにやりて遣申候。是本心と申候。

有心之心、無心之心

と申事の候。有心の心と申は、妄心と同事にて、有心とは、ある心と讀文字にて、何事にても一方へ思ひ詰る所あり。心に思ふ事有て分別思案が生ずる程に、有心の心と申候。無心の心と申は、右の本心と同じ。事に堅り定たる事なく、分別も思案も何もなき時の心、總身に延廣りて全軀に行渡る心を無心と申也。どつこにも置ぬ心也。石か木のやうに有

にてはなし。留る所なきを無心と申也。止れば心に物が有、止る所なければ心に何もなし。心に何もなきを無心の心と申、無心無念とも申候。此の無心の心に能成ぬれば、一事に止らず一事を欠ず、常に水のたたへたるやうにして、此身に有て用の向時出叶也。一所に定り留りたる心は、自由に働ぬ也。車輪堅らぬによりて廻る也。一所に詰りたらば廻るまじき也。心も一所に定れば働らかぬもの也。心中に何ぞ思ふ事あらば、人の云事をも聞ながら聞覚へ

ざるなり。思ふ事に止るゆへなり。心が其思ふ事に有て一方へ片寄、一方へ片寄れば、物をきけどもきこへず、見れども見へざる也。是れ心に物有故也。有とは留思ふ事が有也。此有物を去りぬれば、心無心にして、唯用の時計り働て其用可當。
 此心に有物をさらへと思ふ心が、又心中の有ものになるともなく、是をさらへともおもはざれば、獨去て自ら無心となる也。常にかくすれば、いつとなくのちは獨其位へ行也。急にやらんとすれば行ぬものなり。古歌に、

おもはじと思ふものを思ふ也おもはじとだに思はじやきみ。

水上打煥^{〔胡〕}荊子。捺^{〔だん〕}着^{〔ちく、きょ〕}即轉。

胡荊子を捺着すとは、手を以て押也。瓢を水へ

投て押せば、ひよつと脇へ退き、何としても一所に

止らぬもの也。至りたる人の心は、卒度もの

とどまらぬ事、水の上の瓢を押が如くなり。

應^三無^レ所^レ住^{シテ}而生^ス其^ニ心^一。

此文を讀候えば、おふむしよじうにせうごしん

と讀候。万の業するに、せうと思ふ心がせうほどは

手も働ぬなり。心を生ずれば、其する事に

心が止る也。然る間、止る所なくして心を生ず

べしとなり。心の生ずる所に生ぜざれば手もゆかず、

行ばそこに止る。心を生じて其事をしながら

止る所なきを、諸道の名人と申也。佛法にて

此止る心から執着の心起り、輪廻も是れより發り、

この止る心、生死のきはなと申候。花紅葉を見て、

もみちと見る心は生じながら、そこに止らぬを

詮とし、慈円のうたに、

柴の戸に匂はん花もさもあらばあれ詠にけりなうらめしの世や。

花は無心に匂ひぬるを、我は心を花にとどめて

詠めけるよと、身の色にそみたる心を恨めしと也。詠め

たるとも心をとめずば「と」はと「が」申は有間敷候。見る共

聞とも、一所に心を止めぬを至極とする事にて候。

敬の字をば主一無適と致註候。心を一所に

定て余所へ心を遣らず、後より拔てきる

とも切方へ心をやらぬ。尤肝要の事にて候。

殊に主君杯に御意を承る事、敬の字の

心眼たるべし。佛法にも敬の字の心有。敬白鐘を

ならずとて、鐘を三つ鳴らして、手を合せ敬白

す。先佛と唱へ上る。此敬白のころ、主一無適、一心

不乱、同義にて候。然れども仏法にては敬の

字の心は至極の所にてはなく候。我心をとらへて

乱さぬやうにとて習ひ入修行稽古の法にて

候。此稽古年月積りぬれば、心を何方へ追放

しやりても自由成位行事にて候。右の應

無所住の文の位は、向上至極の位にて候。敬の

字の心は、心のよそへ行を引留てやるまい、

遣れば乱るとおもひ、卒度も油断なく心を

引詰て置位にて候。是は當座心を散らさず、一旦の事也。常に如是有つては、不自由成儀なり。縦は雀の子とられ候て、猫の縄を常に引詰て居て離れぬくらひにて、我心を猫の繼れたるやうにして不自由にして、用が心の俣に成間敷候。猫によく仕付をして置て、〔縄を追放ひて行度方へやり候て、雀と一つ居て〕

雀を取られぬ

やうにするが、應無所住而生其心の文の心にて候。我心を放し、捨て猫のやうに打捨て、行度方へ行ても心の止らぬやうに心を用候。一所に定て置て不自由にて働れず候。貴殿の兵法に當て申候はば、

太刀を打付に打手に心な止めそ。一切打手をば忘れて打て、人を切れ。人に心を置な。人も空、我も空、打手も打太刀も空と心得、空に心は止られまいぞ。鎌倉の無覺禪師は、大唐の乱にとらへて切時に、電光影裏截春風といふ頌を作りたれば、太刀をば捨て走りたると也。無覺の心は、太刀をひらりと振上たるは、稲光の如く、電光のぴかりとする間、何の心も何の念もないぞ。打太刀も心はなし。切る人も心はなし。切らるる我にも心はなし。切る人も空、太刀も空、打るる我も空なれば、

あんとよふふゆひふそのもきふあふふふ
 神と唯福老のひとよる肉と春の空は
 唯風と切つたり一切止つぬる風を切つ
 はふふふふふふふふふふふふふふ
 切つふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふ
 を能ふやふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふ
 皆ふを捨きりけするふふふふふふふ

不見放公

放公とよふふふふふふふふふふふふ
 神と唯福老のひとよる肉と春の空は
 唯風と切つたり一切止つぬる風を切つ
 はふふふふふふふふふふふふふふ
 切つふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふ
 を能ふやふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふ
 皆ふを捨きりけするふふふふふふふ

打人も上人にあらず、打太刀も太刀にあらず。打るる我も唯稻光のぴかとする内に、春の空を吹風を切如くなり。一切止らぬ心也。風を切たのは太刀に覺も有まいぞ。かやうに心を忘れ切て、萬のことをするが上手の位なり。舞をまへば、手に扇を取、足をふむ。其手足を能くせん、舞を能く舞んと思ひて忘れきらねば、上手とは不被申候。いまだ手足に止らば、業は面白かるまじ。悉皆心を捨きらずしてする所作は皆惡敷候。

〔覺〕
不見放心。

放心と申は、孟子が申たるにて候。離たる心を尋求て我身へ返せと申心にて候。縦ば犬猫鶏などに、放れて余所へ行ば、尋求て我家に返す如くに、心は身の主なるを、惡敷道へ行如く心が止るを、何とて求て返さぬぞと也。尤も斯可有儀なり。然に又郡^邵康^節と云をりは、心は放要と申候。はらりと替り申也。斯申たる心持は、心を執らへ詰て置ては勞れ、猫のやうにて身が働れぬぞ。

相ふ分止るを留めや。能つといふは、陰に
くひあへりとも、進退もいふを、あつたふ
分深歩ふよりて、あまに歩ふな歩ふ、深
まをいふ、初を勢長の位、運の泥は、深なる
分、泥よりても、不言能磨さる、水界の如
泥の肉へくも、深ぬや、いふを、すて、り、た、西
や、いふより、深て、いふ自由なるや、を、いふ、事
も、初分、の、内、れ、事、一、期、其、分、いふ、上、段、に、深
こ、ち、ま、いふ、候、り、いふ、事、一、期、其、分、の、内、いふ、事
いふ、事、を、不、見、と、いふ、事、初、能、いふ、夜、の、時、に、都

康能の如要致と云うと、中増利尚深き具致
初の比を、即、形、原、而、いふ、事、は、初、ん、事、を
初、や、いふ、事、に、いふ、事、に、初、つ、を、いふ、事、に、
いふ、事、に、いふ、事、に、いふ、事、に、いふ、事、に、
退、利、いふ、事、に、いふ、事、に、いふ、事、に、
いふ、事、に、いふ、事、に、いふ、事、に、
能、いふ、事、に、いふ、事、に、いふ、事、に、
退、利、いふ、事、に、いふ、事、に、いふ、事、に、

息水より継子念く不偏留

物に心が止らず、しまぬやうに能つかひなして、捨
いて何所へなりとも追放せといふ義なり。物に
心が染止るによつて、しますな、止らすな、我身へ求
返せ、と云ふは、初心稽古の位也。蓮の泥に染ぬ物
なれば、泥に有ても不苦。能磨きたる水晶の玉は、
泥の内へ入ても染ぬやうに心をなして、行度所へ
やれ。心を引詰ては不自由なるぞ。心を引しめて
置も初心の時の事よ。一期其分では、上段は終に
とらずして下段にて果る也。稽古の時は、孟子
がいふ心を^覚不見めよと申心持能候。至極の時は^郡郡

康^節郎が心要^〇放と云にて候。中峰和尚の語に具放
心の此心は即^郡郡康^節郎が心をば放さん事を
要せよと云たりと一つにて、放つ心をもてよ、^{もとめ}

引とどめて一所に置なと申儀にて候。又具不

退轉といふ。是も中峰和尚の言葉也。退轉せず
言に不替心もてといふ義也。人毎に一度二度は
能^図へ行ども、またわすれて常にないほどに
退轉せぬやうなる心をもてと申事にて候。

急水上打毬子、念々不停留。

と申事候。急にたぎつて流るる水の上へ手まりを投れば、浪に乗つてぼつぼと止らぬ事を申儀なり。

前後際断

と申事の候。前の心を捨てず、また今のころを跡へ残すが惡敷候なり。前と今とのあいだをたきつてのけよといふ心なり。是を前後の際を切て放せといふ義也。心を止めぬ儀なり。

内々存寄候事、御諫可申入候由。愚案如何に存候え共、折節幸と存、及見候處有増書付進申候。

貴殿事、兵法に於て今古無双之達人故、當時官位奉祿世之聞へも美々敷候。此大厚恩を寢ても覺ても忘るる事なく、且夕恩を報じ忠を尽さん事をのみ思給ふべし。忠を尽すと云は、先我心を正くし、身を治め、毛頭君に二心なく、人をも恨み咎めず、日々に仕怠らず、一家に於ては父母に能孝を尽し、夫婦の間

わも得より横波平々嘉祥を屯せぬの
道をたり父母の間理こそふたをゆくくち
を考ふ秋の隅々若人を引い遊月鏡はる
而をい老法圓の政を要ふ若人をなをさる
中にするゆふ若人目々にさふ若人もあつた
主人の若をねむふ化せしむる愚とさう若
は移るゆふ若人若人若人若人若人若人若
を歩み附いふに安んずるも豊ふ若人子
の親をさるるゆふ若人の上候ゆめりふ金
はかのはるたといふふ成先也初うふ

金銀のふりき若人 上候自然の府用ふ
まならふ若人を考ふとも何候まふ則
先ふまふの千も親名のふふくふ千の
府用まふゆめ若人の若人のふふくふ
一の御自立りて教十人の親をも一御ふ
はるゆめ若人若人若人若人若人若人若
付い外り人の知事も若人一念なる若人若
と愚との二つ有具若愚二つの若人を若
若人を若人若人若人若人若人若人若
知止る若人若人の痛ふ若人若人若人若

少も猥になく、禮儀正しく、妾婦を愛せず、色の道をたち、父母の間おごそかに道を以てし、下々を遣ふに私の隔なく、善人を用ひ近付、我足らざる所をいさめ、御國の政を正敷、不善人をば遠ざくるやうにする時は、善人は日々に進み、不善人もおのづから主人の善を好む所に化せられて惡を去り善に遷る也。如是君臣上下善人にして、欲薄く奢を止る時は、國に寶滿ゝて民も豊に治り、子の親をしたしみ、手足の上を救ふ如くあらば、國はおのづからたいらに可成。是忠之初なり。この

金鉄の二心なき兵を以 上様の自然の御時御用に立ならば、千万人を遣ふとても心の俣なるべし。則先に云所の千手觀音の一心正しければ、千の手皆用に立が如く、貴殿の兵術の心正しければ、一心の働自在にして、数十人の敵をも一劔に随ゆるが如く、是大忠にあらずや。其ころ正しき時は、外より人の知事もあらず、一念發る所に善と惡との二つ有。其善惡二つの本を考て、善をなし惡をせざれば、心自ら正直なり。惡と知り止ざるは、我好所の痛有ゆへ也。或は色を好むか、

奢氣隨にするか、いかさま心に好む所の働有故に、善人あれども我氣に合ざれば不用。若輩無智なれども、一旦我氣にあへば愛し用ひこのむゆへに、善人は有逆も用ひざれば無が如し。然ば幾千人有逆も自然の時、主人の用に立物は壹人も不可有之。彼一旦氣に入たる無智若輩の悪人は、元より心正しからざる者故、事に望んで一命を捨んと思ふ事、努々不可有。心正しからざるものの主の用に立たる事は、往昔より不及承所也。貴殿の弟子を御取立被成にも、け様の事有之由。

苦々敷存候。是皆一扁之數奇好所より、其病にひかれ、惡に落入るを不知也。人の知らぬと思へ共、微より明らかなるはなしとて、我心に知れば、天地鬼神万民知なり。如是して國をたもつ禍也。

誠に危事にあらずや。然らば大不忠なりとこそ存候へ。縦ば我一人いかにや^(矢違)たけに主人に忠を盡さんと思ふ共、一家の人和せず、柳生谷一郷の民背なば、何事も皆相違仕べし。總て人の善し惡しきを知らんと思はば、其愛し用ひらるる臣下、親く交る友達を以知るといへり。主人善

ひまは異近臣皆人なり是中からずは
日本道管中からず然るに法人道より
一佛公是を知らざる也蓋しきい法人衆
ひとば木の事他國は吾人を公家とていつ
終は法体君義人の名を新し新し親の義
をより少人をまきけ衆と好む事とまた
を成りて法本の政中く由忠臣すたるを
能中由賢是より法事親の義中からず
してその義よりとある事遂に之を義
法事を中く義義一より由忠臣も義なり

自ら中くなく由忠臣因幡友も名のかね
小智ひ中くなくは父子よりは吾人成
因幡たる

一取と捨ると義義をすりては味か能臣は
より法大存より能を尊くし能は義を
より法大存より能を尊くし能は義を

一牛度形法を好み自方の能く法大存を
押くは義能を尊くし由忠臣偏小高を
より上の能は法大存の能に由忠臣接好め
る義能を好み由忠臣接好める義能を

なれば、其近臣皆善人なり。主人正しからざれば、臣下友達皆正しからず。然らば諸人皆さみ

し。隣國是をあなどる也。善成ときは諸人親し

むとは、此等の事也。國は善人を以て宝とすといへり。

能く御体_{「認」}忍被成、人の知る所に於て私の不儀

をさり、小人を遠ざけ賢を好む事を急に

被成候はば、弥國の政正しく、御忠臣第一たるべく候。

就中御賢息御行跡之事、親の身正しからず

して、子の惡しきを責る事、逆なり。先貴殿の

御身を正しく被成、其上にて御異見も被成候はば、

自ら正しくなり、御舎弟内膳殿も兄の行跡

に習ひ正しかるべければ、父子ともに善人と成、

目出たかるべし。

取と捨るとは義を以するといへり。唯今寵臣たる

により、諸大名より賄を厚くし、欲に義を

忘れ候事、努々不可有候。

貴殿、乱舞を好み、自身の能に奢、諸大名衆へ

押て被參、能を進められ候事、偏に病と存

候也。上の唱は猿樂の様に申候由。亦挨拶のよき

大名衆をば、御前に於てもつよく御取成

沢庵宗彭『不動智神妙錄』古写本三種・『太阿記』古写本一種

不動智神妙錄
卷之第一
不動智神妙錄
卷之第二
不動智神妙錄
卷之第三
不動智神妙錄
卷之第四
不動智神妙錄
卷之第五
不動智神妙錄
卷之第六
不動智神妙錄
卷之第七
不動智神妙錄
卷之第八
不動智神妙錄
卷之第九
不動智神妙錄
卷之第十
不動智神妙錄
卷之第十一
不動智神妙錄
卷之第十二
不動智神妙錄
卷之第十三
不動智神妙錄
卷之第十四
不動智神妙錄
卷之第十五
不動智神妙錄
卷之第十六
不動智神妙錄
卷之第十七
不動智神妙錄
卷之第十八
不動智神妙錄
卷之第十九
不動智神妙錄
卷之第二十
不動智神妙錄
卷之第二十一
不動智神妙錄
卷之第二十二
不動智神妙錄
卷之第二十三
不動智神妙錄
卷之第二十四
不動智神妙錄
卷之第二十五
不動智神妙錄
卷之第二十六
不動智神妙錄
卷之第二十七
不動智神妙錄
卷之第二十八
不動智神妙錄
卷之第二十九
不動智神妙錄
卷之第三十
不動智神妙錄
卷之第三十一
不動智神妙錄
卷之第三十二
不動智神妙錄
卷之第三十三
不動智神妙錄
卷之第三十四
不動智神妙錄
卷之第三十五
不動智神妙錄
卷之第三十六
不動智神妙錄
卷之第三十七
不動智神妙錄
卷之第三十八
不動智神妙錄
卷之第三十九
不動智神妙錄
卷之第四十
不動智神妙錄
卷之第四十一
不動智神妙錄
卷之第四十二
不動智神妙錄
卷之第四十三
不動智神妙錄
卷之第四十四
不動智神妙錄
卷之第四十五
不動智神妙錄
卷之第四十六
不動智神妙錄
卷之第四十七
不動智神妙錄
卷之第四十八
不動智神妙錄
卷之第四十九
不動智神妙錄
卷之第五十
不動智神妙錄
卷之第五十一
不動智神妙錄
卷之第五十二
不動智神妙錄
卷之第五十三
不動智神妙錄
卷之第五十四
不動智神妙錄
卷之第五十五
不動智神妙錄
卷之第五十六
不動智神妙錄
卷之第五十七
不動智神妙錄
卷之第五十八
不動智神妙錄
卷之第五十九
不動智神妙錄
卷之第六十
不動智神妙錄
卷之第六十一
不動智神妙錄
卷之第六十二
不動智神妙錄
卷之第六十三
不動智神妙錄
卷之第六十四
不動智神妙錄
卷之第六十五
不動智神妙錄
卷之第六十六
不動智神妙錄
卷之第六十七
不動智神妙錄
卷之第六十八
不動智神妙錄
卷之第六十九
不動智神妙錄
卷之第七十
不動智神妙錄
卷之第七十一
不動智神妙錄
卷之第七十二
不動智神妙錄
卷之第七十三
不動智神妙錄
卷之第七十四
不動智神妙錄
卷之第七十五
不動智神妙錄
卷之第七十六
不動智神妙錄
卷之第七十七
不動智神妙錄
卷之第七十八
不動智神妙錄
卷之第七十九
不動智神妙錄
卷之第八十
不動智神妙錄
卷之第八十一
不動智神妙錄
卷之第八十二
不動智神妙錄
卷之第八十三
不動智神妙錄
卷之第八十四
不動智神妙錄
卷之第八十五
不動智神妙錄
卷之第八十六
不動智神妙錄
卷之第八十七
不動智神妙錄
卷之第八十八
不動智神妙錄
卷之第八十九
不動智神妙錄
卷之第九十
不動智神妙錄
卷之第九十一
不動智神妙錄
卷之第九十二
不動智神妙錄
卷之第九十三
不動智神妙錄
卷之第九十四
不動智神妙錄
卷之第九十五
不動智神妙錄
卷之第九十六
不動智神妙錄
卷之第九十七
不動智神妙錄
卷之第九十八
不動智神妙錄
卷之第九十九
不動智神妙錄
卷之第一百
不動智神妙錄

など被成よし、重て能く御思案可然歟。

歌に、

心こそ心まよはす心なれ心にこころ心ゆるすな。

〔附記〕本稿の作成にあたり、宮内庁書陵部、東北大学附属図書館、国立公文書館には、蔵本の使用を許可して頂いた。また、写真版を取り寄せるにあたっては、国立公文書館の尼子昭彦氏、北海道大学文学部図書掛の高野直樹氏のお世話になった。ここに記して感謝の意を表す次第である。なお、底本のB₁とB₂は、筆者が平成九年度及び一〇年度に北大文学部の講義「日本漢文学」の教材としたものである。学生の盛川智尋、吉田有希、深町寧子、西山恭代の諸氏の協力を得て判読しつつ講義したことは、筆者がくずし字で書かれた写本に取り組む契機となった。講義において誤読した所が少なからずあったので、ここに訂正し、各位に改めて感謝の意を表したい。